續膝栗毛五編

十

下

木曽街道 四 中

六 上下

七 上

ヘ 13
3759
4

木曽街道 續膝栗毛五編 下巻

東都 十返舎一九著

あくれバ伏見の驛を立出。桶縄手といふ所にて休。此所ハ。むかし關の太郎といへる鬼の首を桶に入れて都におくるに。その首次第に重くなりて數十人のちからにおよばざれバ。此所に桶のまゝ埋めたるゆゑ。かくハ名付しと。言傳ふるよし聞えて。

桶縄手今もその名ハ朽ざるとき

門 へ13
號 3759
巻 4

塩漬にせし　鬼殻首かも

かくて平岩。可児川飛びて。御嶽の宿にはきさ
ふりみれ。人皇のさ「本家のナア。このはしもしやナアニア〜。
かくみはく荷るがナアニアへでヨーしかや荷るさへからみつつ
あれナアンアヘヨウ。どんあいそうもんなものがらん。
おいでこんく。茶屋の「休んでおざらっせへませ。
節入まで焚さ。豆腐とごうびの御汁もござるに。
めしよりあがってござらせへませ。ト此あたりより云々

六部ひとり。あとにありさがふありて。六部「ハイ此邪さまたち。四郎謝に一夕これ
さっしゃれ。弥次「きさまどこでござ。六部「ヨーしハイ。駿河の
みんでござるヤア。弥次「おらア又長門とおもった。北八「ソリヤア
おかせて弥次「きさまのあとさまのがらせへに長門ござりやう。
北八「ホニ福禄寿といふあとさまござらう。仕合せのいく
ちぶござらう。おせまさいきさまへ六部に出しなさい六部「ヨーし
ハイ。此あたりはあとさまにはいって六部に出さ理屈が。
おざるヤア。咲てくまさっしゃれ。ごまやアハイ。駿河

の黒門といふ。山家のんごろやア。去年地頭さまの
お役人さまが。よしとこの村の庄屋どのにとまら
しやつた時。朝おきがけに手水まう世と向ふの川
へゆかしやる。わしハイ。その手水さア。おんのこんどん
べいと。こんなながさよろこりしておれんとんどんでかゝみ
つかア。びつくりしてゐると。お役人さまが。エレ手ヤア
ナニやく手水まう世といつしやる。そこでハイ。庄屋
どのもきつまつて。せふことがなれへ。お寺さまへ

かけ出していつてきいたら。お寺さまハものしりだア。
コリヤアハイ。てうづさア。ちやうづハ頭と文字にかくであんで
もちいハあたまの人をまう世といふこんだんべいとそれ
からハイ。村中がよりあつて。エレハイ。誰のあたまがあかん
庭れ。拵子田のおんぢいのあたまが。あかいこそあかい
が。コリヤハイ。さんとぼちあたまだんで。横つぴろがりふ
ちのごくら。役にやアたゝまい。イヤ弥平が所のあん
ちのハぞふであらぞ。コリヤちいの天上でよからうぞ

ようこそ。とお続きなめて。ごらしつんたてらまてさめん
だんて。せずとまつてふるし。そんでろお役人さまのお前へ
はん出るめんだんで。髪月代していきませぬとおふ
がハイ。自剃ふでぞろかくやつておる内にも。エとしく
ござるに。手水をやくまなさるつると。お役人さまが
せらんなさる。そこでハイ。庄屋どのが。てう門を今
かみしよういつてねまきふおつきふまくらせませぬと。
つらしてまをエとくとそびろしまるめんぞんて。ごらしハイ。

冨まるこそとうろくえうして。庄屋どのとはらんでお役人
さまの前へはん出て。ハイもう頭へこれでござるといふと。
お役人さまが。エレチヤアぞふしたもんぞね。さ門きから
手前まうせくといふ頭の内へとまつしまる
めんでんて。コリヤハイ。おくみをまくらぞえんでと申
つきらぷ。ごらし其のおてまを。ぐるりくぐるりくと
まうりならぷ。おち紙まる。そやくまなさなへといふ
まやる。ごらしハイ。そんなふそやくまへつて頭痛

がせうぞといふても。お地頭さまのお役人さまが。いかい
しかるあんべいし。さうそうが有ると。国のおまいるなど。あくさ
まアくるりく。くるりメメへど生まれるとやぶく。ぞん
でもハイ。お年貢ふいりよあんのんべいして。おどもべしいかい
しかる。そこでハイ。百姓の太郎ざえむどののいふい
しやるおやアおらアしよ時。お江戸へいくことがあるあい
よ。おそれどじやア。しやんべんふいくそこをでうけと
いうふとうけが。しやんべんのあんであらうぞ。あさまじや

おざるまのと。いやまるのんざんで。ござるらハイ。しよん
盤んたござ座敷へもち出をべのとらんでく紙おれ
のんざんで。おらしハイ。ありやアお役人さまのおくきさつい
その據じやアはん出さまますよし。せるこがあると。
あたらしい盟人。しやよんあんちくとろをこんでおらし拈
出しさう。。役人さまが出りしとりござそやくころとよう
すいてあるみぞでと。そのしよんあん訳。あんとさうしかる
とみてみくら。自分の願アあるいうしやかて。以人

もゝへんでぶらくとさるきやるのんぞんで。コウし
ハイ。そびふてんておそ。コリヤアハイ。御分体ゑハこんぢや。コレし
どものきやうのん盃んとのまつきやるとア。ざアーしたのんざ
いく。おのれつさうら。ソリヤアハイ。きよんぢんでおざるわれ。
のふよさ川きめハまぜ。さうしどもの空利が抜ぞのこと
いつてう。あにコリヤア。きよん盃んぢや。屋根で受お
あかひがきやるとおのつふ。コリヤあぜ。みくいせうぞ。
きよんだんを手みふあせ出しいそつてとお侍人さ負ぢ。

頭ないこゑをして きつうきめつて おのゝ侍紙馬鹿ふせる。
ふとい奴ぢや。手討におふせるぞと。腰のものをひねくりまくの
きやる所へ。さんあぶさる庄のそ。エヽチヤア ぬけろノくと。
まア紙さうくぬかしまいしが。お役人さまの前がこゝな
あいとつて。命かけりふ。コウしをさんあふ坊主のわざるして
村中からまうんぢぜんくれさのんぢやう。それでハイ。コレ
六部と桜のひとつく。さんあふ諸方とおつきまゐら六
ト弐とのしれ。あさりハそらまで紙よりをがう。たどりゆくに。
まやくもうらふ坂のたてこぶいてると。らや盃のゆるめ。
「やまんで

美濃太田
雪丘斎

岐蘇て求め
仏信給や
[illegible]
[illegible]

主。ぬしハどうぞこうしてあがつて主。おやまもさぞあつく。

弥次「あの人の彩紙ハこりや仕まつてあるが。あのおちの

とさらぬ人ハありやせう。

此茶屋の娘がくらべけ暖簾乃

るもたのふ紙うらふ坂なす虫

此ところふ客をねまるがごとくや見物して。ふたりのあとむさぼへたらしく
ゆくハ。ちらくぐらん雨とらふ。此縁側をさしたる。あげけのてふれ亭を
見ちせとその男一人めしつれる。是弥とのふハ此家ふて。弥治ふうつのや
そのやの弟そくふかうが仕ゆく。その弟がけそこそぐこを見ぐてる。人気ハ
随まれくふ見物しまして。弥次ハこんなもせう。喜多ぞんせう。こうして今にき
ゆく人をひろぶり。さハやまりのそくこと見ましあがりゆく。あとより。

弥次「ハアおまうさんの雲助もめづらしい。きさまみさけの
人足ぞ是ゆ。がらびの人気「アイおまへやナア。坊主様さといふて地獄
中でのだがうめんでや。ののあさそう「がんさん。よんぞ
そこでや。坊主「ようお蔵ナア。六年がさその女房めが追放
ドや。来てくまさんと。そおりのおんだんのおごさやうに。
おこぶつくまで。いきそつておナア。こうし念仏ハゑい身げんお
ありうらんで。それからナア。酒をのんでもくのさわらんで。
後ふや六年も居つてきてどうてナア。コリや精進じやの事れ

おれとこそ。鯖(さば)のあしをおさへるやう。さやうら団子(だんご)
ならそ。大根(だいこん)と豆腐(とうふ)の汁(しる)くぶちこみまして。おてら
のおみや化(け)とこゝしふさうが。つまりとのそこらからそめぐり
そうでがすナ。ひとゑハ気持(きもち)でありそうでこさいハ。八「くゝゝ
汁坊さまハさんざんくぞ。骨(さかな)をして来るとハ。そまハゑさぶら
さかなさ。坊主「十二の身ハぞこでアおざりまあん。けつこで俗気(ぞくけ)
りやハナア。精進日(しやうじんび)じやの。なんじやかじやと申すの。
坊主の事さんじかこてナ。ほかそうぞうかやア。極楽(ごくらく)ハ

せかのふこゝし。年中(ねんぢう)念仏(ねんぶつ)様おやの。百万遍(まんべん)じやのと。
たのまれてあるきやる所(ところ)手前(まへ)な。人足(にんそく)ふも出そうでナア。酒呑(さけのみ)
おそらふまあんと稼ぎ(かせぎ)するもうまんさうかくなそで。酒肴
ぞこへだらしおやそ。それがあけらかやなんのあん。おなみんなか
おぢいハまねせるものでや。おかゞ「おかみぶ旦那(だんな)がきらつて ねや
ちやる。めでたことなか。坊主「十二 旦那ハよく稼(かせ)いで でござ
らせる。めいまいぞこでアおかしいぞく。○ト此ときあしのほうがやかましくなりおもてにかねがなるとみて
きまゝしこで 寿「茶もあとぞかく。○○「ドンドン〳〵 ○○「チヤン〳〵〳〵。

「なむあみだ〳〵。ト かごそばのりもののふたをあけ、ねんぶつとなへ、ちりげのさくら紙をあけて。「ヤア

権兵坊がさいぜんからの、のしこゑ人をまどはす。念佛の

住職が坊主であけくれまでまんざい。ちいとその一座

けいこのぞやらの、善郎がかわつてくれさい。コリヤ

ゑいところであふさ。トかうべがうちのあるじがかわりて、ものをとも、権兵坊ハ、さきがねをうけとり

のりものかさゝるのでわるかんそく「コリヤこんな所でござる。

うしとめくなすこの仏じや。ゑいところであふさ。南無

のさもアくサントそんちのからけ肩にいれそせうるい。

かんおけをかつぎゐる男「京町のあまいろの〳〵ちく〳〵とかつらちやんちやう。

かつふおゝいの仏でおざる。トのりものをかつぐのである人、今までくろんぼうけ、

のりものゝ、きめくずそゆく、まへそこのあくり、

まうひきて、さきまへのこときハのものぎんそでんがいをゆひくる。

今ぞんおけをうくものゝまゝ、さうひらく三くの紙をあてゝるのほば。

今かうりそのゝりのそうつぎて、せうかり三くの紙を。ひらく

あそくねがひ。かつぎゆくれたるかとおもてすぜふなり。くわんおけの

さきへ。諸法実法、諸行無常。色即是空。空即是色とかきゐる

日本のゝきとをあつくるのめのまかせうのゝりものくさきく

さゆそ。すゝとめちゆくぞ。無常の風ある人ハよく結ひりて。おねまき知

らぬつきそひ来りにさい「コリヤく是非のお無常枕れさへ人ぞの

あのうの男アん陀けて。

さて穴にうずじや。そんぢやの無常くのきをとられい。のりものくさきかう。

「ホンニさうでごりや葬礼(さうれい)がまちがつた。そのはずさおら
ちの葬礼へゆくのじやなかつたぞ。「ヤイあんごうめ。
こつちやのさうしきじやわ。なんぬかすぞいけどのまるめ。ト
あつちもこつちもでさうしきをうけぬけさせんとすれバ。さうしきもあとずさり
して。細え道のおしあひまつくする。寺の門おしやうがし。さきぶれくるをさき
わち。寺の門へもみれバ。つゐそののりものを。門内へかつぎこみせぐらうて。なか
おけをかつぎし　あのどらもハ。さうくと寺の門おを。ゆきとぎんとする。さい
きのをつび。「コリヤく。ぢんな葬のおのりもの。ぞうちやへやるぞ。
コレきんちやじやわいの。ト引もどされてのりもの
もちがふかく。ト　あいかつぎしかんとく。「ハテコリヤ
ぐわんおけもうろたえて寺の門へかつぎこみ。ト引く手間。此門おをしわりたがひては
ひろうし。死るのりものく。棺とぐわんおけの。ぶつつかりて。はさまりてあかり。あいをのけ
のりもののとうかつぎし。かご。ぐわんおけをうばし。かくとも。
さきぶれにふかれて。おもしろさも出せバ。ぐわん　おけも。かつぎあひて。中へとりかつぎ
とりがりわけまして。ばらきあいそ。かのおせう以ぬつとくぐわん
おけへのれんとする。「コリヤく。なんとするく。「何をするぞ
おせうあきれて。
のじや。ト大きに気つきのけ。たゝきまはし。「コリヤア。お怪我(けが)なさるな
のりものをかつぎ寄りにれんとく
とまりく。ト　これはうろたえまちがへて。棺をおろさずで。ひからとら丸。ぐわん
きいてまうハ丸ぶんのを見のりちらし。あがらふ。かんじんのぐわんおけの。あとさき
この石ねをうち。なにも。かつかうしてあるうち。のりものハさんくと
くわのでゆくをみて。ざいしよ「コリヤく　おのりのしやまなそく。トよびかけ
あふう又出でゆとははぶし
らんハ棺をかうばぞとび出し　たゝきちらして。かりくおせうを。なをとけ
のせてるふ。まみくぶてう。ぐわんび。とまるかつぎ。錫杖ふきさん八。

信州上田
小諸
倡山

云ど中こゝろついて来り。おかしさあちらこちら。大きにひしして。

まそぞれるすゝんで仏とまちがひて
をがみゆく旅人いきぼとけさま

ふたりハ此いきぼとけを見捨てゆくほどなく細久手の驛にいたる。

簾乃あけ出れバちゝ路細久手も
何いふべき汗のふきさふ

それより痩澤の辨財天を拝し。琵琶峠山ゟさしかゝりて

やせ澤り辨財天のあるゆゑに
盛衰ひくなすれびわとれ山坂

かくて大久手の驛ちかくなりければ。此中の宿引とみへ女出て。ちらくと立かゝり。ふたり取巻。女「おまへさまがた。お泊りじゃありませぬか。弥次「いつさんゆうとお泊りぐらう何屋へいつせる。女「さくや一番屋といふがいゝといふるぞ。女「さうやハかつふ

おかはりがあるでヱス。ゴミしどうぞへおでまへか。通人「マア

きさへいつてくられお絵さ。女「よつでヱス　私の宮観

て、ひとくそより外に。お客様とあるすがでけぬ　ふ

で。どこへお出てもせじせ世うがあらまいすな。うたし

どこへお出なさる。お俗れさるなら　おいくそり。少八「新法師

ともによつくろさ。お人様頭をしなさるか　さるみ　ふん

なといてしまいませ　サアく　お出まへ。ト　ささきふらふて　ふきり紙　床のを

ゆきさ。せうそえ久まの宿に　女「これ　足でおざりまする　おさんしとん

入り　かけゆけそ

おかまりがおざらせくて。ト　ゆうちかい　さきへかけらで。白眼「コリヤよつよ

お出てさ。コレノおなさる。お湯とつてあげさつせへ。ト　女そて　ふさ　まへかしを

あらひ。おへるあるとさつそく　ふちきつきて。八まずひくるところ。ふたし

寸宿のめしめり二三人ばれそ。宮のある肉紙それを　あるく。

が拇の外八流山の猿よ。かくそへあるが　みさ　かららふへ

法てたおん。あつちいさん。おとはりがござらせるか。女ぞその　髪かう

「そんなあがりなされ。さいぜん金戸の金売さるか。

いと入紙でじやあつさぞい。めし「やんぞこヱス。ごし　金売

さなしてヱ。本山からの別家でヱそれど。アニハア　コンそく

でもないこんだア。きんぢよのお伊勢さまへおいでなさら
せへそつてからだア。かみがたの女ハ。みんなかみの器
量ぢやア。おいらの女郎衆とくらべちやア。お月さま
と泥亀ほどちがひやさアと。それだからしいひなさろ
ふが。けりやア都の女郎衆だアから。きれいなもんだ
よかん屋いが。そんだいみやア。おいらのせうれ喜ぎア
の。茶ぢやアのこ。はやせてころさろいくちやアおさ様
まいつたしじもハダア。みそけしじやアおさらいしたが

こそいろぶくもようちかやア。ふと胸やひさろをハ
おちやのこでおざるハ。わら紙馬鹿ふしさまんじやアト
おやくざしきさまり。女「コリやアハアよくとおらせんまし。おまへ
がさきびしうん屋いふろりよんでくれさろせん。弥次「ハア
おめへがる六。そこの女郎衆ら。罗で人が銭が行く。女「ヤ
ハアおきのどくなこんだア。モシかしてやらざなふ。食ア
とへ流んせしまさろ。北八「ハイそんなおきなれだろ。
おろかどおめへハ御中めのだ。か猫を出しさら銭

借るを。取あつかひてゐなさるな。女「でうける
とつけせずと、早く金さへ遣なされ。ドリヤいつでも
まゐらうぞえ。清吉「イヤ此女郎衆ハ。たべもの好き。
まのひとそのむかし〳〵。女「アニサそれがおかし
かんべいコレ。どものまのくせハ。蠟燭だけどアゝら客人
さみしやア。かゝふきつき中をするよ。サホヽヽ。ゆるしてゆく。
その日ぜんとゆゑので。ほひまゐるとまぐれふとんを まちまち。さらんとする手紙とらんで。小八「コウ両様さんの
きんちがひと何様かひがある。きそてくれ縁ぞ。女「ハイなん

でや。小八「のちにまちが来人来てくんな。女「アニいつの
せる。それへかせて身ありませぬ。小八「ハテ野暮なことを
コレサく。清次「その男の胴をふさぐるなかな。痰をかき
どうならちが来入れ逢せん。小八「ナニまゝよ邪魔
魔をさせる。コレく。あつかひだんじやが、極くどうぞく。女「ヲホヽヽ
なにやらぶとこてるなし寝る。トつまらめして行けてゆく。時うち清次のそばへ
手をふれし。あしく。その女きてゐる。女「おもちやあげまをせど。小八「ありや何ぢや
そうく。時ふ今こゝへ来た女中ハ。うちのむすめか。

奉公人衆。○女「このぢうから毎とばまで来ておやが。
なんと志やりましき。○少八「イヤなんともしれ人が。それ
どいつ新造ぞ。お女人でなぞあの娘を取持て後に
こしよこしてくんなせん。○女「十二あのでハ。今に脊戸へ
猫の番にいきやりませ。○少八「ヤア猫の番とハてらく
猫が出ますか。○女「出やりまするとも。いつきにそこなて
の猫きに畑がありますが。毎晩畑あらしやります。
此ぢうから小屋紙こさへて。それ〳〵番にやらしまする。

○少八「それならぜひゆかう。○女「ヲホヽヽ寝なされ。この
脊戸におちる。○お出なるとしまいまでぞんぶんに。めふおかうさげ
なされ。○トいひすてゝ立てゆく。此間往来の手水より二人
とも猫かけると。みなそれもえがまり。そくそを打なすること
のかとのこときこえて。せけんもひつそりとありけるに。またハひとねいり
て闇をさすふし。まづじつとしてみてゐるが。此うちにうけてハ。まつあか
わらこ。それ〳〵猫ごゝろとぬけいぞ。てんがふゆくありして。それんがらく
出てみれバ。そりやし月夜也て。そくちかのびくあるに。せんちんの
ござりアをを出して行き。ゆかくそりそら。きり戸をあけてうらのかくこ
出かけつんれバ。むかふにきてでやと取りしきぎ入きそて。むき志なる
こゝをひくかくしたるゆゑさて。そうくいきそてゐるに。そのそくを
あの小屋の内ハ。みつかどこせんこくの女のこゑ。されども。男のこゑもきこ
えて。二三人も居るやうすに。きこゆれハはまりねと。あとへもどく
めどろく。それから中に。何かハ志らぬぞ。おとし穴ありそふえそがしそ

おちくぼり
けむり。北八「アノミ〳〵コリヤおかんど。そちんどどこら人おかし
こちらさあかさ〳〵。トおしら[illegible]より[illegible]宮[illegible]
きんさその中で弥次のこくるまふば。[illegible]あがりても[illegible]
ふられてわくうちる。これハ[illegible]さる。おとし[illegible]江戸へいきてハ[illegible]
こころあり。ひふも井戸のごく。まつたくに[illegible]宿の[illegible]
わそれ[illegible]それ[illegible]を。そのうのごく[illegible]
つらをうらし[illegible]。弥次をおひらんで[illegible]
あるいハ[illegible]。その[illegible]それ[illegible]のうくのりる[illegible]
さる[illegible]も[illegible]ひろ[illegible]
ひかく[illegible]。[illegible]。北八「[illegible]
けてくまし〳〵。コリヤぶまもきる[illegible]弥次さうんど。[illegible]
ましへ。[illegible]なさけてくまヤイ。[illegible]ヘヤアイ。ト[illegible]

よびコあけども。あその中ので。そこへろくにきこえんぶ[illegible]。[illegible]
来るものなし。[illegible]きざしきゆえハ。弥次ト[illegible]目をさまし。[illegible]
ちんへゆきこもどりがけに。[illegible]弥次[illegible]
きえんが弥次どころふかえぬを。[illegible]。弥次「コリヤぞうへいけさ。
目をさまし。
そこどこ[illegible]「弥次でやく〳〵。
きこハく。まてふしぎな。トいめやめんどう[illegible]
弥次「アイ[illegible]ぶ。[illegible]
おこしぶざしきふゑへやせん。それらへハまおりや
せんう孫。[illegible]「ハアそれハぞうへどやあろ。[illegible]めんべん
みぞてもおぎろせつさめんであろぞ。弥次「イヤ[illegible]
ちが人今も。[illegible]へいつてそこらちらさん[illegible]

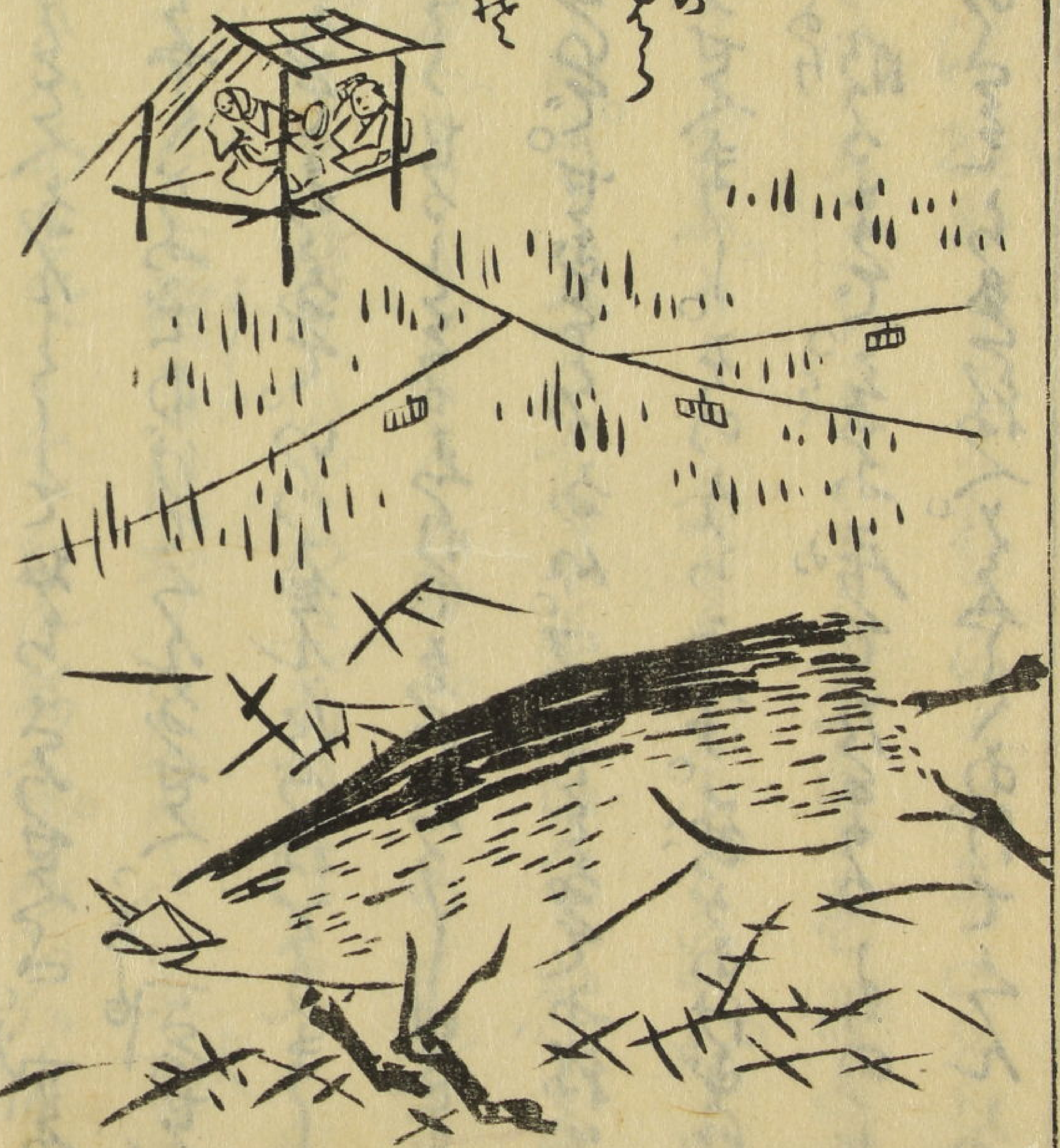
たがひ〳〵やせん。○ちう「ソリヤどふでやく。○ト おきいで縁がハへ
うちわれざしきへ来り。きさ八がきて○ちう「ホンニ久しいさうせ之
行けるこゝをぎ平んをふまへて置て
ぬ。わし そこ来てのぶらしきづくえあゝさめてぶんな
され。その中ふじやあらまあら。○縁「テアニとんだことを。
なしじやうそのくへ出ていて。「コリヤ〳〵おうちはヤイ。お客さまひとり
うしなふてさ。のしなくぎろへ。縁がけいかけて「ソリヤ
戸棚の引出しに入れて置くぞよ。○ちう「さうでやく。
御隠れさるは。戸棚の引出しにおさまらせると〳〵。
それでもまあおちはるさ。○縁「ナニおちやう。縁へかくし
さるソリヤア。何が引出しにありますぞ。○「こりしや。
此どうの皮足袋の皮足袋のまんでや。○ちう「何ときくられ。
皮足袋のまんでハなし。お客さまでや。○縁「イヤさうなら
きまつでならん。その皮足袋が寝て居るがつてゐき
ことさ。大きなお女の下の女郎の縁どこへお通ひ
中てもいかさまのであらう。○ちう「ハイこうしまてられ。
三四十年も中どや商売していたが皮足袋が

「イヤ夜遊(よあそび)にいつてこそ。はじめにきこえぬ
皮足袋(かはたび)じやアあるまいし。あれの男のすきよ。それでこそ
いきな事ぢやア。きいた八ヤアイ／＼。○ト打しやれたよつぽどうら／＼の
くるわでもあきたりふ人のよびこゑく
こゑをきく。くるわふきて聞。
わらつてきかせる。「ヤア眷戸(やど)でも淫(ずれ)
「公アみんなにあれが性(しやう)に淫(うら)の
男のこゑぞく。○「あらしいつてみて暮せぞ。
とりやく ○トあらしまく打しやれてくら／＼見ゆ
の中そて人をよぶよる紙。ゆきそてみるぞ。
「ヲヤく ○「だましぞく。○お客(きやく)さるめ。
あくのおらく
あるめまいて。
口上(こうじやう)○「ハテこまつたもんでや。○ヲイ番(ばん)小屋(ごや)に虎六(とらろく)
をらんか。ちやつとまてくるそさ。○ト大きなこゑでよぶと。
さらまち。おもてどもの
家(うけ)
来(き)。
「只(たゞ)雑(ざつ)さるなるおんでや。○猪(ちよ)でもおちましうて
さうせ
もうしお粉(こ)うらくろ
てふそふ。○「イヤ猪じやなるいお客(きやく)猪(ちよ)が
おちさる甘(うま)くてさ。○とるる障子(しやうじ)とつて来(き)てくれなさんな
とらせ「イヤそれしご八ツ。トうの紙(かみ)帋絵(わらゑ)どのくふうして
そりましてさ。○「それなんぜうしてめつさぞい。○おの
法(はう)るおあい八ツ。いけるのおぞのめでや。○こうしもの

おふも。洗濯(せんだく)糊(づち)かしてくれさいと。法印のかみさん
ゐふてゐるてゐるなア。わしとうちにあるぞよ ありなア。
ちがひ人はなるほどなふ。ちしなみいとこそかして
やろーぞうね。きてござれ せうでや。あのかがかして
いたさねへそ。コリしてあるもの〻。うちのせんだく
づち。さんだして法印さまへ。あの法印づちの
おかざをふ。なんで樽拾(ちりど)紙かしてやるさ。弥「コレ
そのいたさくさいはあとでしてくれ 弥へ。コリやア めし

コリヤおかでいしとしてなんとしてゆちさるせんさ。北「コウ
ちぢく。ちみくどふぞあげてくんなせへ さいせん
くら。そこらなてあるなそ。いつ食んだがねそりまし
ふ。アゴゴるせるしとてゑれてゑい。そうし男でも
らんな居(ゐ)るので。せぶとうなんへ。アエそうなてふ勝そ
なと おざる甘へ。まし。そのうちふ寝ア。親(おや)があけぶん。
弥「よも宵(よ)の明(あけ)るまで寝(ね)ふ居(ゐ)てたまるものか。
さむくてまことに気の毒な人。とかくあげてくんな

けさよりは風も
追ふて草のちる
山くじら越して
出てかゝる
愚舎一得



あかねやござりやくあげてくんなさへ。そさんく。
「イヤこりやごうぎじやな。此もしきもがいぼるぜ。サア虎七
どうぞ〱。「おまへそこのふりをつけるが。もし
かしこのしやうさん。ぬしがかしてやらつせへさ。「ちく
らくいつもく〱。「こりやちくらくいのりん。がらつむ
あつらうつせへまするか。「イヤのしハ。そうぶらいのさん
だらけものでや。なんでこうした網をかみさきおつで
きやらうあがつたト言いつつひやうしハせるると「そでなんでおさらせへさ。

北八「ぶつくさいふでもなく」ト まさつくさ済く、ぐらからも かんしんして [illegible]
そ、おかうおらのおまへとらうさへ、かれこれをきいてなげきた。
てらしも さぞうらけて、おまへいくのいくるげあて。
弥次「ヤアく おまへも おつこちてきさんした。北八「ヲヽヽヽく。
からくり「これハ
御本尊さまの。まのあたり御来迎。阿弥陀如来 おまへ おちる
ところハ。他生の縁でうるうるぞ。北八「ささりく。
ふくろうの 是から 御来光ひかる。御安置く あくその
こく中しまして。からくり「さうでやく。コリヤ さいかりとある
ドや、御ふたぞと 金八のりうちし いろいろくさひるる。
北八「そこらくさもさと。とうとう あがるさんだんだん
しそくんな甘く。さむくてがらくらゐ大口せと。からくり「ホン
さかりるぞ。よろしのふころるから。蒲団かつので あがら
まバよかつた。ト此内からくりそこらぞうのあんかんで いたしで出。弥次「ヲイく。ドンおと
「ドンドン。からくり「ヤアく 猪が出おつた。ヲイく。からくり「ヤア
またが出た。コリヤく 虎七く。おつかてくいとまらく。
弥次「ホンニ此のおまへ またおつこちてへたまかろかん。からくり「イヤ
さて紙おとさしあふ。さりさぞこさへてとおあじや。

そこで又進ぜますぞ。「北八「ヱヽコリヤとひどいあ
あんまり酒じや。なるほどさむさがあたゝまりました。こなた
くと猪めが来やしませぬ。「弥次「ヱヽわるい。ト
ふたりがあとの中で。わらひ出して。めいめいの寝をとり出して。こゝかしこにゐる。
此内亭主はいろく見せけさいや。さらにそのおとこもやくそて。おとこども
がやがやきたりて茶をもちて来たり。亭主おかみさんと。ゆうべ此寝をみつけり
はなしますへ。なかくのしそうで。ふたりすがらひきあけら出し。きてさ八
がゝくとふたりも寝がる。あさもはやふくも。またころぶ 弥次
つらつらけしと見りて。ぶつくさいひもしもとけれど
ぶつくさいふ。「北八「イヤめよさんざめいふあかれて。ねたよん　きてこ八
寝んぶ寝でいる。あんまりよく月がさえて。い
景色でござる。うかくとうかく出て。猪のおとし穴へ
おちこちとして。やれくあぶない。ト　きものをぬぎかけて。ふたり寝
そうく　よぎんとひっかぶりうちふしたるが。やがて　夜があけて　さむさこらへがたく。
まこくにおこくし。此寝を出のがるとて。ましろう　のまへと紙
弥次郎兵衛おこして。
大まうひしるべ。
大まうひなまやちる紙切れして　完　東
あてれなりまして　あぶなこのけが候
此大久保の宿より。大井まで三里の道なり。十三
峠といふは此所なり。ふたりはいそぎて。西行坂まで

よぢのぼりたまふ。小高きがけせし出茶屋(でぢやや)ありて。ちやや「おやすみなさい。休んでござらっせへまし。弥次「なにかさかなんぞあるか。「まんざ何もござりませんでござります。北八「たばこの火(ひ)も無きか。「いんまこそ茶をとりまして火をとうけてござんせまへぬぞ。ト なにかゞちと紙出してこちく 弥次「ありやさんぞまゝやりうつまでうつてみても。それトやつがはやく弥八。ありくち紙出しも北弥八で。石とうまぶちうち

でき。だく「ホン三そふぞく〳〵。コリヤはけどけをとつてくれて
ちやとつく。ごたりのどんどんさん。はけどけをひろ
くれさい。コレおまへ。そこらあての杯やおつきもれ
とひらふそ来てくれさい。ホ八「コリヤアおりかてへりし
こまりやつさ。だく「とうりめて来てくれさい。ごまさ
つけぶふ。これ〳〵おまへも。そこらへおいて居るので。
そこらあての紙ぞりつち紙。ひとはりをとつて来てくれ
さん。どんど酒のめ。銚子がかつふをくるので。たつふせてとふ。

强八「モヽだんごへはちをまぜるのか。そんなら猪へ。
だく「コレ〳〵あやまんべんがあるやうでや。おまへさんとこなたへ
さきはけて下さい。强八「ヲツトあやまちあく。だく「その
手ぬぐひ鍋へ湯を入れてうけさい。强八「ハイ〳〵。だく「ヤレ〳〵
せうてへあれ。おまへのよふくど。そこらの猪鍋へゆふら
せへまいし。强八「ヲヤあやまちべんしやうまあらんぞへ。
だんごをおあげるのか。コリヤおまへこのそろへけぞ。
弥八「この豆腐へまでおまへく。だく「りんきめとんどと

ひとつふうでござりませぬ。ト宿ごとだんごをたべたがるは、ひとりびさあがきとわきまへし。
ねがふてあがらずとだんごとさりたる亭主を出してあげきをだしてくるとくわしけ。亭主を「サアだんごくわつせへ
まし。○弥次「コリヤうまそうな家団子だ。ぱく〳〵。○北八「どうあ
さん此だんごはいくらづゝさ。○亭主「アイひとつ四文づゝ
でござる。○弥次「此きいはいかのさ。そのかわりだんごの皮
をむいて。くわふかやなる様へ。四や此だんごはたねが
ちがひでゐるが。ぱく〳〵。○トあつまるつまつてみるとあまりを四文づゝときめて出すのはで
亭主の「どうあさん此つけみせくらさうらふ文なあ。

一パイ。○亭主「いゝ。○弥次「一かま六七つくらへさらず。ふさり
で都合十二文。サアよしかく。○サアいきやせう。コリヤ
おせわでござりました。○亭主「アイコレナくまつろせへまし。
まし弥次郎兵衛まつ紙まちがへさ。アリヤ北八めでや。
指文づゝ三さん。あがきは法けふ六まけふ茶屋の世
話ふ。○弥次「はい〳〵さんだり本郷立場茶屋ござ。
様へ。○ト立かどの十二文づゝとらひて出ゆく。

本屋
衛店 續膝栗毛五編下巻終

續膝栗毛六編序

穆王巡行天下八龍之駿。一九先生道中の旅行して為一人の膝栗毛毎日足數の宿次喜多兩個を乗せ。弥次さんに編ごとに筆の先綱問屋場に。傳馬以為

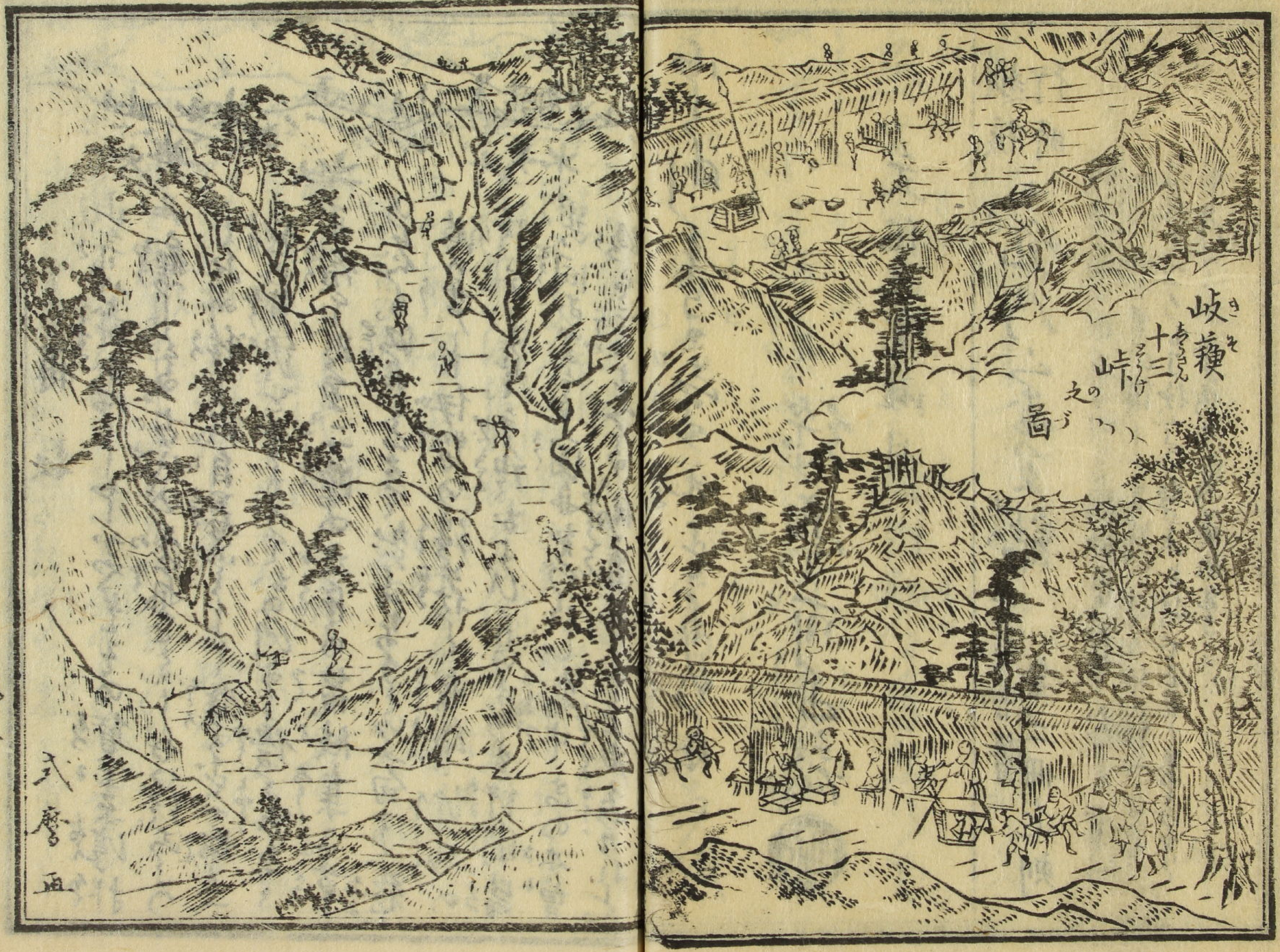
入る岐蘇街道十一帖もあれや
るとの名物の同方の貫目ふえ来。
木の続編十一巻同東都のかたへ
戻る馬子も小冊の歌口馬かなって。
一寸小前の諸兵衛皆川料蔵
ある馬士くるし。序は

ゆる刷を尚出もとめよ
緑亭可山誌

文化乙亥睦月

越後行脚 気乃毒里飴 十返舎著 全二冊 近刻

越後高田横春日町高橋孫左衛門が家の記せし粟の飴の一曲を業得しまた思ひつきたるひとつ話の上京弁一風俗などを子供らの勝手にお好でよませし茶番のちやり小咄なぞの類本なり


岐蘇十三峠之圖
式麿画

再叙

山気八嵩に帰しやかゝやきその質素淳朴を旌しける。古代の遺風をとゞめしは、ありふれに移りて自暮しうして惜らむ一郎一邑の村路をもつぱらにしてわのかゝ優ぞ長ある。を信に形至二ツ際の六尺の筑波集ま。草のなかも心なきてかゝるなからふ句あり。難波の芦も伊勢の浜荻。教所にかゝる諺および何の沢も諸国皆異同ありける国ぶりなりし。就中木曽路は言語まゝなり。而れ音は上声ありあれど。

その筆にあらそひがたく。只鄙ひなる語をもとめ給ひし今年続六編の続句を郷里ね。稿成て後信州松本の何某ぬし予が旧知なりしがまた年々の著述を俚言の違ひあるよしを記しる土人の風俗癖あるまでを精く書しらせられしによりて予初めの順をも案思ひよりて信州善光寺に参詣し所々を経歴して是を見聞せしに。松本の人ぬしのいせしゝ符合を為せしおほし。依てその次七篇となし同行子が閲おもひえらるゝを序となし

今より至るの徳を述る事 志可惶

十返舎一九誌

木曽街道
續膝栗毛六編上巻

東都 十返舎一九著

月はおぼろにて入。桜は散をめでたしと詠じ給ふ
うれしも理なるかな。都会といへども生れたる地は。不案
見ることに飽て。珍しからぬを東都の人。多く江の
嶋金沢にゆきて。鯛鰈を追出し。鱸の生てをかく
ともしよう。尾鰭をつけて見ぬ人に咄をするも
一興なり。ましてや京大坂および諸国に遊行し

木曽屋
そば
青鳥舎

て日毎にかはる山川のありさま。目なれぬ人の風俗。言語のおかしげなるはきく楽しみ出會

志まじれ膳所のおもしろさに滑稽節を来に春多八のふるづまに書あもるなまべんにかかる

つらもなうて。たふ〳〵濃州大久手の宿を打出。十三峠をすこして。大井の駅にぞいたりける。

てるま継来らけくゆきちがふ鈴ちんるのさとのさと 〽シヤンシヤン 主 〽うまふこがれてれしべい

あねる。徒おやぢしやどの咲でちる志よんがく 可愛 クロモジノ木 ちや屋の女

〽おやすみござらせ。中しこ茶アまいつてござらせ（ほし）

弥次 〽チト休ミやせうト此茶屋へはいる 女房 〽イヱ

北八 〽かゝさん何ぞありますかろ すんざ。なんにもござりませんでなア 北八 〽おさつぱりに何の

があるものの。ごうく啥さがるぜ 弥次 〽なんだか何か緑へがの緑も緑へ

ら。ほござとそふらくさのご ハミト此内上のさうり。そしとろ六十ち絵おやぢ。あいの。ふとりのそる

ぬのこにありめんぶらさのぶつさきさむぎりさきたる侍一人来かり 〽ドレいろぶくまつていかむろござる

あやあろかりもなうゐろト おなじく此茶屋へ入そのれバ あをかの茶やとやへて 女房 〽こしへきんざ。

あのおりじやなかろうぞとおめひあつくるに。おたちせい

こんでや侍「きさまの郷(きやう)。大たはけとおもふて。忿(おそぎき)
からかふて来(き)なさる。コレハゆるされませト弥次郎のそばへこしかける侍「一夜(や)
もとの客(きやく)はいかい。でもすることすまいこんでや弥次「さやうでくさ。
かうさるが客(きやく)人と。茶もうすくのめるを侍「さうでく
コリヤ半(きさる)らちよふ客(きやく)はごこへさまらせへさ弥次「ハイ大、
久手(ごまり)宿でござりますを侍「ゆりやたいさうござらせへさ。身ども
馬込(まごめ)より羅漢(まわりうち)おつらさが。今般(きさ)七ケ時に出かけおつさ。
北八「わたくし共(ども)ハ横道(よこみち)をなさつても。二年さきでござる

ところのござらる大まさ(だいじやうぶ)侍「ゆるさるぞうでくだはる(じやうちう)
常刀(さいとう)のこんでや。第(だい)一船(ふね)うてう絵橋(たかはし)などぞは當月(とうげつ)を
出しなさるをふまむで弥次「さやうでござりやせう侍「ほんざ
おふくろのてけぼとこんでや。宿(やど)へはきさおつてもきんな
座敷(ざしき)ともあけさせて先客(せんきやく)があるとも。湯(ゆ)へハ身(み)を
供(ども)らにもさうおふへのまとある弥次「さやうく侍「まんさあるぞ支度(したく)
などもっ余人(よじん)よりハよういく出しある。コリヤ半(さ)さる(ささる)らちの
てけぼとこんでや弥次「さやうく侍「そのくせ宿賃(しゆくちん)も沢(たく)

てかりかゝね弥「旦那（だんな）ぐるでも、ありやそふいふことはあるまいと
おもひ、藝子（げいこ）銭（せん）へかりやせう北「よふありやせうともあるが、一人（ひとり）
まへ百五十文の外（ほか）。そのうへかりかゝねて弥「その代り
あすこから出来る祝儀はありますを宿（やど）の女に上（じやう）
しへのがあつても、よろしおますとも違（ちが）ふて、旦那がたに
親分（きろうと）して、ござります。いちやつくるのがなりますとめへ
北「イヤそでげすとも。一晩（ひとばん）廓（くるわ）上揚（あげまつ）人さまりありかる
とおもひ。宿（やど）のおなごも、いふと、あいのがありおりかゝし人。

亭主（ていしゆ）を呼（よ）び出（だ）して、コリヤ今宵（こんや）身どもが此所（ところ）に。あの
女をせ、ぢきに男ぜいさへ問屋（とひや）の人中付（つけ）るがどうか
するといひ、入組（いりくみ）なりと、亭主がさまりなりますれば。お伽（とぎ）に
さしあげませぬともいひかゝ弥「ハアそんなら、その
女が。そふしてあすこの女人（にようにん）まゐりますか北「イヤそうぞり
其（こ）なんどくに女房「モヽ、すぶかんにくさいますでござりま
すと、あすこからこのあいでへござりますね弥「ホンニ
きまくらへ北「ヤアくゝ身どもが此宿（こやど）の旅人の吹売（ふきうり）をお

うしろへきて ト おどろきあはてゝ さうぞくをかけを 弥「ハヽヽヽ あなたさま あんまり
えなしふうなこつて。どんだことをなさろうこ 北「イヤ弟
子どもの吹売ろとおめへらう。弟子どものきせるがれへ。
すんざ揺つてみる。コリヤきさまがらんまは一ト吹
そうろ其人この。弟子ども相識へござりあしたのじや
弥「ハアさやうならば 北「コリヤまとまいぞく。なんでお弟子
ひとりをこがろうつて 弥「さへぞり 御付ませなんざ
はめんなすへまし 北「イヤはめんなさいとぞうり ござをまずご

こゝがなうらぬど 此尺八のあんのはてきよきすまずを得るへるてだせするめのご
北「イヤお弟子と言はねらつきま 弥「ねだしよござなござんへ 北「
まいておかりば頭巾をねるまをねらまと。おがらちなるんぞ
弥「コレサきさま八八たまつてゐろへ。さればお指ださへ。北
「さ、お弟子のおうふに流の普調法志平はめん下さりやせ
ふろろちが不調法者平はめん下さりやせ
めがく 弥「ハイく 北「流後を暮々嗜者おま 弥「ハイ 北「あの田へ。
其分ふさしおくせんでないが。弟子たも至用をかく

てあきだへ予算のさきとぞ　ト此内上のかたより十四五の娘がかけあがるおのかも来り。此侍を見て

「ヤア ちうわじやく 「(弥次)どんなおたちがござりませぬへ と ト此ときさしあたり

るをはなげべ。こうしもいるうちありて此茶やへそのこと。まるきみなござりやし。ふかしきづくろ紙ありやして。かのきうらひへもきせず。ちんもんなくろひ

(侍)「御存(ごぞん)義(ぎ)く。時にも無(ぶ)体(たい)をしく ト此ひつ。やすぎごりくふらし。ござ紙一枚ありて持ちこ

自分のふところから紙。その持ちそえて「サアらつさんいろもいろ。ふりつけ。差ぐりするうちかの書ぐき

(侍)「これへおさらふなりまする「(女房)さようならさんきがん

らよ。まするく来(らい)年(ねん)も国(くに)にかくりませぬと ト右の侍へその名など

出なから。ふところから出て出であ。ほうをまちて出であ。「(北)いやへまちの二本(にほん)差(ざし)めぐ。あれさ　かうぎ。此茶やと　井けり

どれ存(ぞん)じよろつて佐(げ)山(さん)にねがいしやアがろさ「(弥次)ようさが殺人

さる死が侍といふ人(きゃうぶ)りのござろ。おやまするにようく殺(ころし)へぬめへ

なぞへまぞまけへくのよかきさん。侍にやアぞつもかすは

よ殺人の時におあやアおめへ(ねんごろ)懇ななさとござ。ごつの御国(ごく)

人(ひと)ぐ殺「(女房)十二(じふに)ある人(え)三(さん)治の万(かん)軍(ざん)(しう)秀でござりますとおなァ

「(弥次)よつ万軍秀めつ。いやへすへ。なるなど江戸をあまんて。

今(いま)比(ごろ)は得(え)る時(ど)分(がん)だ。そんなうちのお(きう)数(ぐく)めへよりねが息(むすこ)

まで生(さい)蔵(ぞう)ござ。よてそんなりあんまち。あやまちずと

蜂しや
何筆敬
人
さこの里
芝泡舎
一蟾

くらき宵や
めまとく
むれゐる
荏の子
九光舎
一井

よろこびのを 北八「これ見なせへ。おめへとよし〳〵の座頭坊
ざとおりかゝりて。ゆうてきさふかけさせやァがつた 弥次「ホニ
こんどめにあつた。サア出かけやうトちや代をはらひ立出るとて

侍とおもひのほかの男蔵に
ひやかされたる二本棒鼻

かくて大井の宿をたちて。はやくも岩瀬村小万
場をすぎ。中津川の駅にいたる。此宿はづれに往来
の人。ありうきなりみるを。かのごまのはいと二人も立寄

覗きからくり出しておいて 宛若「サア〳〵ござれ〳〵おいそぎで
ない御方は。ゆる〳〵やすらかに。ぶん〳〵ぐる〳〵と御らん御下
さりませ。初まりは京都三条寺町にて四条河原小松の森。大
坂は天満天神山王道頓堀にて。評判にあづかり
ましく勇み。ゑはなひとつなりたるあんまにとござれ。お器械
なんぞお慰。扨お結束のきせるを只今一呑でお目に
かけますとぞ。此わしもきゝしやぞへ。サア見りかけまするよ。
まづはじきするを呑で。お尻からくされてあるにつけまする。

ひよつと尻へ出さうに。小便の出るあなへきせるが出かけると。
ソりやせくらいじやさうい。てがむりうしい。去年伊勢の
古市でお笑なさるさ。ヨシがけきせるを吞だ時。後の中
で。ひらきさがる間違ふて。ムントいけむえづきふ。きせるの
吸口が。小便の出る所へ。ずつと出かけると。おもひなされ。
サア跡も先もいかん。コリヤどうしてよからうとそつと
ても。まあとんだ事。それから商賣お休となつてゐる
と。世間へひろいめんどうやうへの。妙見町の心太屋さん

から。コレ〳〵穴居がらへきせるの吸口が。先のあなへ出て。
紙撚だやとりよころちやが。ナントヨシがおのうへ世へ厄介れ
て来てれりも。珍銭はなろうとおもつしあるさうい。コリヤ遅ばん
で居よりやて。その心太屋さんへいてうら。コレ奴きとるの
じやと。ヨシを心太舟のまへ。丸裸になつて立ちておそ。
口からつきてるふあなをつきこむとおもひなされ。それから
ふきゐると。きせるの吸口から。そこのあなから。ところてん
のぼへるが。ぞろ〳〵と出るさうい。コリヤ珍らしい。古来の

おやこが。山のかみにありがたなるぞてでそこらでんや
さるが。ナント子らしいか。世るのつんせいに。いろいろのみやがら
くりあけてあまりどこなりまのへおりやせまい。今に
評判になって。商ひがうんとあつかう。コリャ小も便銭
とましてやろうと。それから毎日そあいにさせると。人さるが
つんせいらしに。朝から晩までおし合へ。御見物へ
あれどごまどがひとり。ところてんをあがるおきゃくがない。
コリヤ あへんぐどやうしが小役の出るにあらう。吹出させみよに。

はりつけてあるものを。見てみなさいへ屋根じやと。そこら紙
所いのまして。コリャほんまもののじゃとおもって。あつさがこ
みある木の鍛冶屋さるがから出まされて。どちの内へ
来てくまにまいる。吹革が損じさるに。あたらしく
をかまり小便をひるに。音顆に引きころてれきあつて。
ぞなみはすると。おりふから。コリャを見せさらしの太間
にをかうてて。口の中へ紙を当て。撞木のやうなものの紙
をまいて出しうりへまつりさし出ると。吸口からフウく

と風(かぜ)が出て。火がおちるさかい。ちつともあんまりおか
しかりて。ツイ吹出をひねりし小尾籠(びろう)ながら。おならを
ひとつブウとやると。鍛冶屋(かぢや)さんが。コリヤ此吹革(かいご)は
あかんさかい。屁(へ)の用心(ようじん)がこちらはとりわけまじまする。ハヽヽヽト
此内のくり引こらじ小て。緋の合羽のくくりひもにきつて三紙
せあひさるおやぢさんおしてみろうじが大あらびをして「あんのこんどろ。
がいまはべいたいてきせるのゥのが呑(のむ)のござる。あ
どけさふとくとぞ。こちらのあうふやァ。家蔵(くら)のゥらん
のんでまあつくさふとるござるア。だおちゅわが。ひざこませせお

トくちのうちでいひながら出かける後から きく八郎兵衛おやぢのあとにつきそ

「もしく おまへの今のひな さことよ。家屋敷田畑ともみなてまへの人のあ
ろうに世間ぐちねいのめぐらしくどざりやせん
「そのぐくらうが村にもでとえきな身代のふとぶ
ふとりどぶくさぶ家蔵のゝぶちかけて頭挌と申すが
まちさで発句べいよんであか屁のきまいみやアその
身代のゝ。さんなよきなくおくらしてえまいおくさ
ふとぶござりやす
「そんなうおめへがそのおうでも頭
挌が村役かきてる庄門ら兵衛風久
「イヤ挌文八兵衛おやアめつさアかきやさね。西の肉へるさきまへ
「いくその挌文ドやア頭へそいつの庄門のてさ
「ハアそれいのせうめんでありやさまへがよくおめら
のせうめんなうらてんぢうららアきくやする
「そく
おりしろへおかちがさあござ。おめへその頭挌が出来ますと
「それが出来るとそ道ながらいて道連ざわの紙
「おすへごアそれいのやさうせるう
「アイまうちへ江戸

のかのざ。江戸の三囲といふ所で。此ゆふだちや田を
みめぐりの神ならばといふ句をして早に雨を
ふらせし男さ「ヤア〳〵おまへ。ソリヤア たまげたふうだア。
わしらがあんまりやア慕ふみも そんじやアござで元好
でござりやア。あんな今夜アおらが来て こまう
まへねへがお伊勢さまとは「弥次「いかさる給も知らざ おめへの
所へいつておせうふなのりやせうろ「次「ヱヽ おめへ其さんぜん
ならうぜとおそろうぜ「弥次「ハテ かまうこつてアねへ。いきさ
やせうがおめへのお宅へ「喜多「うらが所へは此さん紀の三本松
といふ所から。二里ばかりも上で福田といふ村でござ
らア「弥次「さうか銭のいらぬ所へとござ。きさま八いうドヤア
所へ「おやぢ「サア〳〵いきやるせく「ト それよりなかく上りよ村坂なるさ。吉発坂
より谷路にかかりて。ひだりの方に山あり。へんのうふ。繕来いまれおもて
山なとのかかりてとさかりつぢうちにもいろくあれども。おまり
ぞくし それハこゝに記して もぐふみのおやぢのくさへつきそひかなはじ村のやくへ
とうちゝ。からまうさ。我今はなべ大うちをあごありてよ右どしのうそこさ
とうく
うり「おやぢ「サア〳〵いんま房わり おかく コリヤ 女房くかか。あんおや
さアござへいざおかくさ。それ夫のお宮さまア おまなごうら

こゝへひとづ川て来なさるぞ。ヤイおちや。きさい。湯のゥ涌(わい)
てあらばこそんそくだちへゆうふらん出してゆりて
来さい ト 付肉なくもよめもそしていでゝ「ちや コリヤどうでもよふござらせへ
ましさ「よめ お足のゥおからおさぎなされておあがりなされ
まし「弦次 中津川からこなさと道連になりまして
おそまつしやさと肉ふ是非来てさまれとおつしやるから。
さんじまし給もおるおひ下さりますとな「なべ あふえ
な山中でござらア。あげぎとめのもどござらなのふ

「おやぢ 既にも肉にあきとりい「ぞく いんまお陣屋さるから峠に
来て待ちたじめと待らんでいぎこおりましさ ト 内証
あふりやおしをあるひあがると。おやぢあんないしておくのきうきへとをしらく
ゆるふるさ家給にて拉げをふれべ。ふまる世ろしのさそつけいあいぞれ
ども。二方様のひろきざしききにてさこの可ふいてのおちらひを久ぎりて佃ろ
ざくろそろへてあり。こしぞりいさころぐふられて前まわりのくさりける
あとつき。らんまのあり〳〵の諸ふおもんの折枝をわりるるがすんさん。やれそ
十二三のお女が。手ぬぐひをかぶりてるすし。ちやたなこおんさるべきさあり
て来る「弦次 これへ給もおるまひへなされまさるな「おちや あんでもあげぎ
めのへござらないが。案内がらい鍛冶なめらうひかしさ
それでふしろあげませおとしおめひおつて「杢八 そうりや

「此地酒(こちざけ)でござりますト此内(このうち)にもしとはいものでありけてゐる。ふくさといふところでこれバござらぬといふ

ここにおぢろうをにらみ

弥次「コリヤ酒がからくちにやアあいますまいがマア

のんでみらアおかしくもねへすましト かつ色へさしてひとくちのんでみれバいかにも

かうまひとくちもいけぬ酒なれどもひめがいゝときのすまいめなりにてかをしかめ ぞうさうかふのけ

鮎をくふ所は山椒をゆへるとさわやかさしとし 北八「ひさしぶりで

きうしのとんな「おまへのものをおかしくなされまし 弥次「ひとさる

めんで一ぜんサア弥次さん一杯やらうと弥次ろト おんなのさてはくらふやり

北八「こりやどうも江戸の味噌でくふといふやうにごさるも旨味

噌じやアあやまる 弥次「酒のわるい鰻がいゝ弥次さそれだけ

ハ不肖するがいいト えんなしのうちさといものをくへてみてさうてぬるけてこれバござらぬなう

をかしうゑづくまへさ江戸わり 北八「ここのおめへが今山椒をなめるとおなしこと

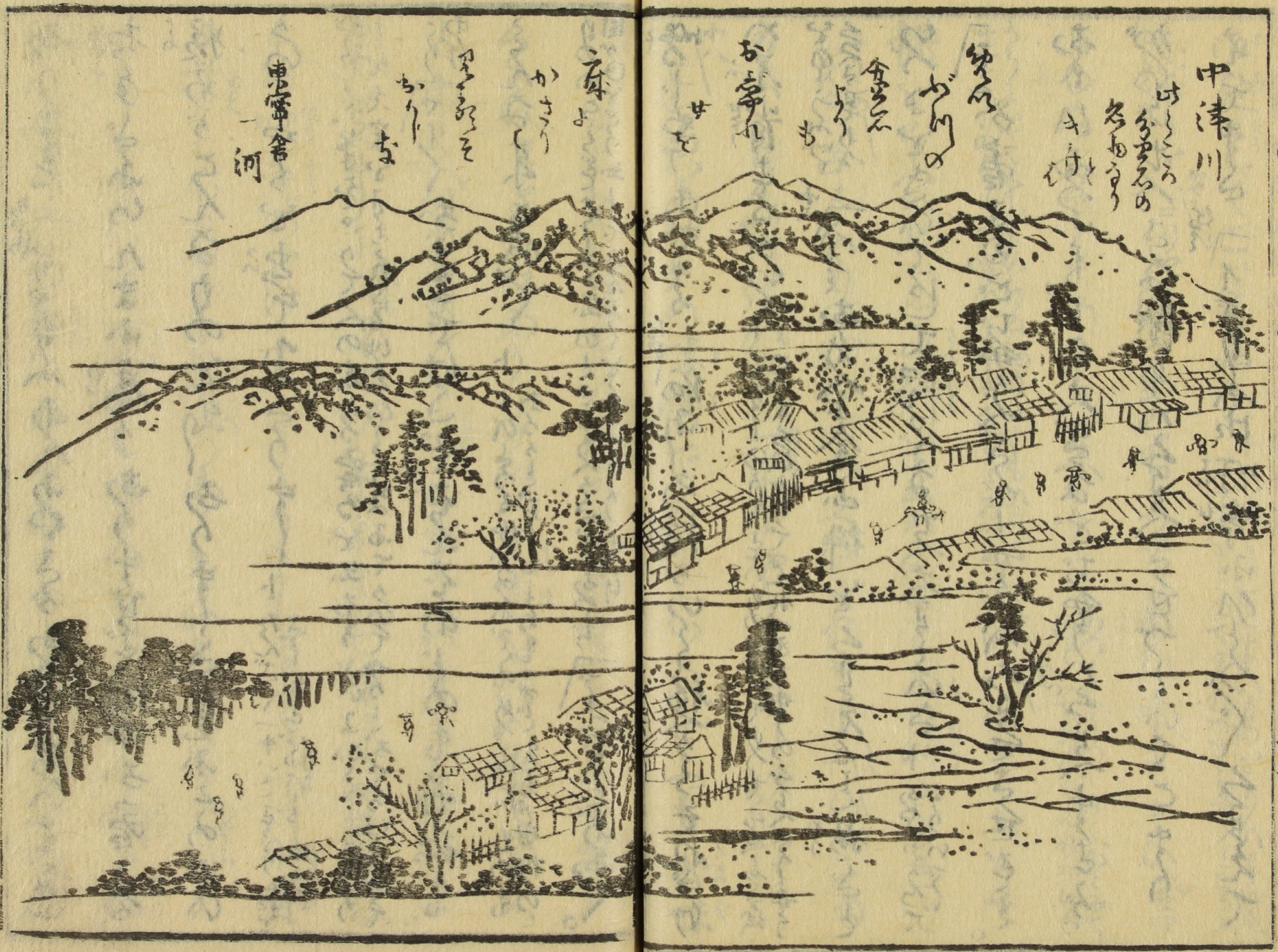
いふことをきいてゐにしてコレえらいうまい大ちきいぎさト あやまちくろてあかいてく

「モシお客さまおごゐんすなんのなら

ありはあつてもこれ大さまざおかわりすぎるが

かいちつさな鮎めへらせまへさせづらいでこれ

まてやく 弥次「イヤめ此町峠ににちうぐとらえて


中津川
東寧舎
一河

ありますと「コリヤめいよあんまやさんがあるといふハゑらし
お手がふいんまに喉がありますぞと時にお客さん。
猿めがこんなものを出しありまして足にそのゑい
らいと思ふを出て下さります　トたんざく一まいとまぐり筆をさし出さば弥次ら見て何
べらしく筆をとりて人の志うる発句を出かう云ハかへんとこえうり
しかし文字を書きつけるゆゑひらぐ事にてゑそ見るとおやぢくぐきて
とうりあげ「やしくおろまでけさぞだんだあどのも若松も。
こんなまさいく　トよびよろ此人この下でのめづらしいものも
あろうしだてもしめもつたどももつ家内の
めのめらくぎとちくま出ひところ久すおやぢ「アこうとあふく。
目がまとろやしてうんざくどうまふとりあげ

豆へんく「コレだんだあどの念仏へ申す、其人よむのに戸
うさい。コリヤ若松あうりうる人天窓を洗ひ出すとまめへ
とあくへいうことあく「ハテどうくらへおとしてあく。よ
まつ其人申し　二「ヲヤサいんまよいまだゴホンくお客さん。
その吹売のウけして下さり申しゴホンく「ヲテ小豆
が粥こおれまさへ姑のあかなへふとぐテ「ハテ
甘ろしろいマア胡麻つてきろ其人。あふく。咽が鳴
雑炊噌の屁の句なり。あるんどかさところその屁

すつ嗅かしぎ、コリヤおもしろいは 弥次「ハテなるほど。それ
へうこ甘がちがひは甘さ。喉が鳴るかとし味噌の屁
じやアござりやせん。○おやぢ「あんでござる 北八「出来のよかする
霞ぞ野辺のにほひなりとはよい句でござり
ますと ハヽヽヽト 此内船中から(…)てのござさるがごとく大ぜいの人こぞ(…) してござらさまが。きぬくかこぎきぎ(…)
かけゐござすべ。おやぢもともよそしてゆくゆゑ。弥次さき八も。ゆるるはかまなくそ。ろうまのうこともさ、のぞき見れバそろまをたきこなる男二人そのあか大男てんでよなうてよ。おそびきとよ(…)とこひきなかう。ひとりの男が「コレ〳〵とうちさて。おそろしとぞる此男めけんかぐ(…)して
らくおやぢあんの料があつてざよするのく〳〵ト

あいくござゑいゆてらぬくまるが此家のむすこをとくると。村役人とみえて人あけたまをきこるがくそくでよあぐみて「まつ〳〵よろしい〳〵。
わゆもさうぐとくするには。御亭のうせる男はなくが
めつてきるせざを「コレ〳〵縁十わしまべのあんの料が
あるうまへくなるのがらうとそれの鉢よ左(…)座屋
さる(…)嫁出で。久野縁が妻の皮の(…)。ジロよぶのて
わくそこいとコリヤお吉付がけよをりぶするのてよ。
ハテ久野縁とらやア。にしやア久野屋縁十ぶするう
にしのらんまちうゐはなるうきをも貴仁仕やまとく(…)る

めのさ。気のどくなこんだあれど、お珍屋さまうち
の言付(いひつけ)だから。ぜひとてもがなへ。ゐんきよも孫太たと
談合(だんかう)のうへにしたけることをぶちあけてゐるとても。
むげちゃあるめへ。わしとのうがぶるならば。ひとごろ
ていうざとしかりひおって。此孫太(まごた)ぢやの。義(ひと)十ぢやの。
孫兵衛ぢやのと大勢(おほぜい)をたのんで。ひとつりかこむのぢや
ら。あゝもうらが恨(うらみ)やかりへなくいぶよかろぎとのま
孫兵衛「そふいふとも。わしらもたまげる理屈(りくつ)ぢや

サア久米蔵せがでてゞなへとあきらめさるがよかろぞよ。
久米蔵「そんだらとって見し。おらも面(つら)の皮(かは)あちがれるおらへは
ござらなのよ。わしもいふお珍屋(ちんや)さまから。ゞは
付けさつせへとって。をもぐ縁(えし)のうしてもつき
さつせるそふぢやがむげちゃない。わしが面(つら)の皮(かは)のおつは
ふるいからも。あくもとふらくつてそつぞたまけて
きましたせへ「ト久米蔵もあげてなく。どうも孫兵衛もきのどく
そふなめつひあきさしてゐるがさても此ままし
それのひ付けられし。孫兵衛もまどしかしよからなてしたかしやあかめの
きん。さゞらのよ困らなさしてはらくまで。孫十めろしけんめのと。つき

のけてにげまはるひやうしにふたおごとおかんをふところへおしこみ、ひとぐるまをけと
ばさぬやう／＼ころばぬやうにあとをもどりてひいてくる
どうしてもきう／＼ぐるまこはれバ緒十六とうこうのくわうりとあきらめてみるかる「アヽてきさなないおかめひを
しつくご緒十六ァみないが。いんまのさうらぶさでコラの足
のウ一本なくなつてしまつたぞ。そこらにやァないかうんて
られさい「あふひまくの足へいんまのさきまで二本
ありおつたおやァきいか。ドレくゥァ一本しかない。徒
ふやァないか。ふるつてみんさう足へ「インヤなひでく
「イヤおつかし折でもしちやァコるろうぞと。おかん
さるがこうつてしまやァせまいか「ホ三おゝまくあく
うろうろ見くのウ一本しつうなないがめし由宮へでも
さうくべハせなないか。おつまさんへめくおめへの
足くハウレ緒のうろのあつちに二本まがつてある
おやァ緒へうく「ドリヤおんかあァ。仁義袋のウえく
とうて。コリヤくろうのおふく目足のゥふんぐんぞふ
気がつきおつらなんぞァめし「コうしあんじおつくふ
あつて仕合ぞァめし「サア見ろう緒あおたかし。久姓

感和亭鬼武

狐の顔の皮のうちへでも這入さんは「イヤ／＼こらしはねへ。人の体の皮ァむつかしい事がないね。そうしてあの体ァ、かゞやかどやがあつて素人にやァ剥づらからうぞと「おめへの三ツ口のところ。そろ／＼とひんむいてつらうぞ。サア／＼こんなかわつて女りうらせく

下女うさりきさのさいちう。当村の寺の堂りき来とくとあくておしうらしきが来りてあくをかしのけ

く。久世狐がほうの皮のうむかれると「コレ／＼まうつ大きな声をしやるな。むげもないあんの科がある。それをどとおめへあつて

まこで。あんでござる「おとの名がお細工ものだ。へ用ぶァとりよこんで。久世狐が顔の皮ァ。それでとふと

コレお陣屋さまうう。代官付のうち出されやしたり「おゝおちうより　たん客の書付　を出して　見せると

「ハイ／＼コリヤァ宿でさへうう。ひとつく気がよいこづらうぞと。お役人が役者で出くるだけだ。狸なんどらなく、ありくこのごァりし是は久世狐の顔の皮の

こんでへござりやすね。仏様の皮のうち剥でもつてこいと

いふこんでござりやァ「あるわどうぞでありやすぞ。よし

どもハ久のぎとあるらう。此久世面繪十の鐵の皮の
らんであらざとしおりひあつさふ。コレ繪十。にしのらん
とおくて仕合(しあはせ)ごアりし「冬の繪」そんごらコらしのらハおやァ
ござらあいらコリヤァ おそくらさるのあらげで。コらしの
鐵(てつ)の皮(かは)ア葡萄(ぶど)るすふかくをやきとるすよ トらあし なるべくあけべ大ぞうハ大
コくらひとありて久世繪のあきをときごまく入ると孫疋らきこ八とれをコえてふきらくし「孫疋 八ぐぐ」なるあど
あまぞかいくさ絵冊(えんざく)とも糟味噌(ぬかみそ)の屁(へ)とよんで
もらて久世繪(くのき)の鐵(てつ)の皮(かは)ハあつしいく へい

椚(くのぎ)とバよみそとなへて引剥(ひろはぎ)ふ
かりしくぞよいはらの皮(かは)

木曾街衢 續膝栗毛六編上巻終

木曽街道續膝栗毛六編下巻

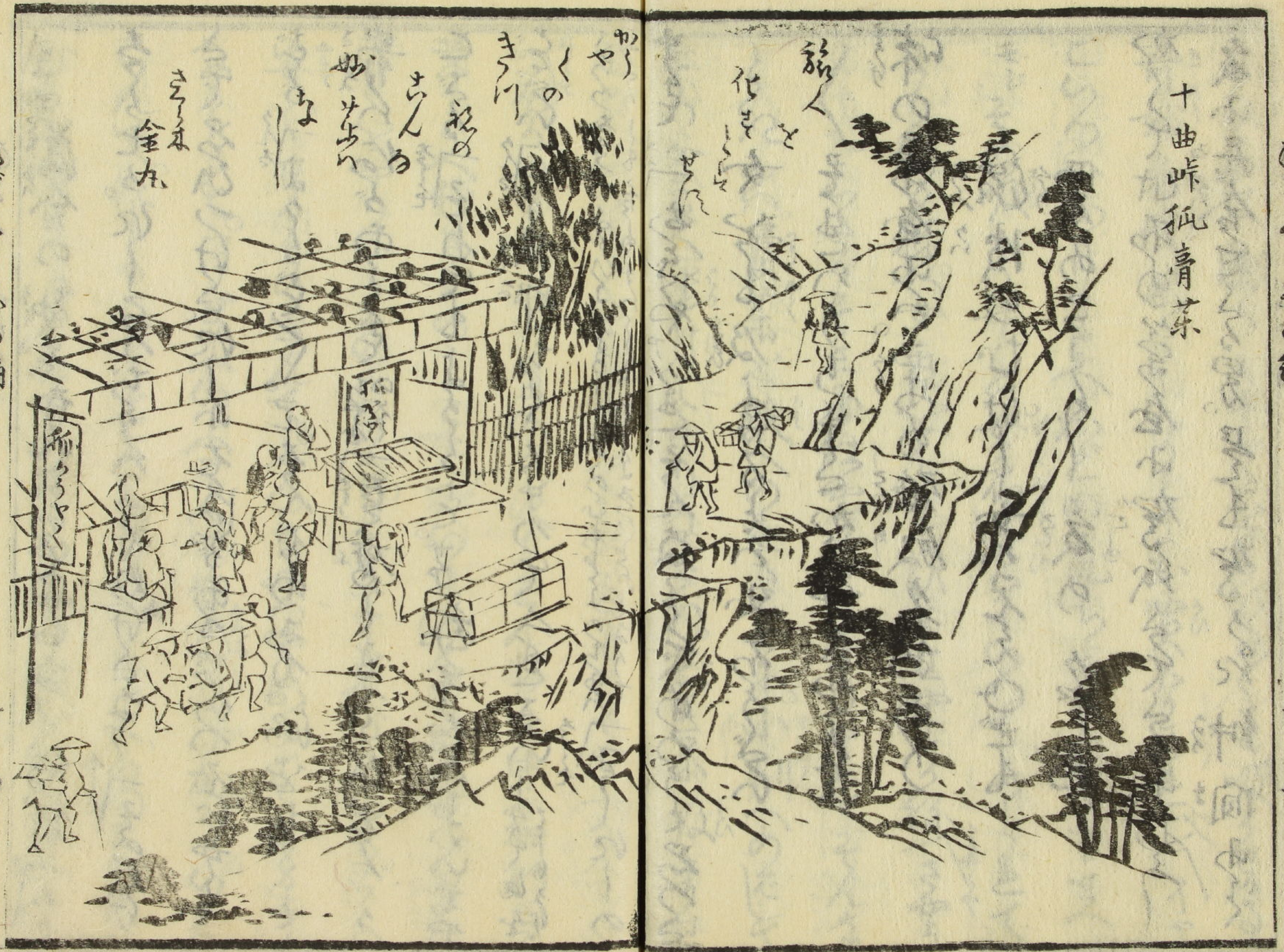
東都　十返舎一九著

行山家のもの寂しく。松風の音耳につきて。夜も寐られずて。あくるを待て福田を立出て。山道をたどり〱。落合の駅にぞ出にける。棒鼻の茶屋女ども。往来を呼たつる「おやすみなされ〱。お煮染の出来たてもござりますぞなア。おはいりなさりまし「ごんなさる。安くしきませぬぞろ。

呑ていなやうせませ「イヤく駕にのり飽た。
気なりしく　ト弥次郎に投ゞらんあとよりつゞきかゝる「そんなら紙にろ
すんどうと。呑て見さつしやいませ。まんざらに
とまりもとけるのでこりどもへなア憂ことぞや
喫て見さつしやい。酒が一鉢百せうに。うちの
かゝあが此中から。疝気を病でこりなア肝が
ほへるうら。酒手でいらぬとふの旦那ざうでく
「ハテ がつまは 弥二えへ 北八 いらつでのせる

らへよふに見さつしやい「そんなら弥次さん。
そろそろいきませう。おいらアどふもくろ足がまだ少し
なまけて来てどうも呑でいかれやせぬ　ト此所にてかごのさうだんができて
きまりかごにのると。弥次郎ハさきへ出て。やがてかご六十きをつく。さうげなさうしろる。此ところをきぬかうちくとらんとする家あり「サアサア
お買なされてござりませ。当所の名物枇杷葉湯。
御道中のおあしの痛。金瘡切疵病ぶと其外の
御きうりやうぜ。ひとはけ付てなをる事うけあひ。
わらぢ吸がうちくのさひにつけるなら。金持の金銀を

さとひよせ。夫（それ）故女中（ぢよちう）がたをもぴくぴくと吸（すひ）よせるが
奇妙（きめう）希代（きたい）。あくしなきまお咲（ゑひ）なさるゝ「イヤ
とらへありまへ。かごの尻（しり）ちとまつて下さへ。
モミその吸（すひ）がらがとくへ女郎（ぢよらう）買（かひ）にのつてふらしまして
より後へ女白をも。さとひよせまする様（さま）「さまう
く。おくらぞことに仕まうがござりますと。ぞんな
ところへ。賣葉（うりはく）と紙（かみ）へのをさぎとふ。小判（こばん）へのぼして。
その女房へ手付（てつけ）て出りなさい。あきゝに吸（すひ）よせ
ますと「なるほどそんなことであろうとおもつて
女をも吸（すひ）よせるといふ出ものが
そりやうちまさかうちかくにくぢを
浣（そうげ）の茶屋にて。栗（くり）の強飯（こはめし）名物あり
浪波（あぶみ）のむけし女ハコんえ。ども
栗（くり）のこはめし　夜（よ）の　名物
かくてけふの茶屋にかご（籠）ゆくてぐるに。都より
夜に居合（ゐあひ）せぐる男。是も籠るや仲（なか）間にいく


十曲峠孤青菜

「ムヽ、ヒヤア落合(おちあひ)の釼(けん)きさんぢいちやいなア。(ぢいさんの事) 「北 そのねげ
さう七ツ。にしこんぢうへおくねげさなア
さでおひつけさ。にしふたはしがある。いつそいから
だろ 「弥次 よかろぞもく。コレおんなあさん。酒をちくと
肴(さかな)へなのがあらうぞ 「茶屋の女 豆腐(とうふ)とこらしひだんのう
ござる 「北 それでもよからうぞ。サア釼きさんぢいいさや
ござい 「弥次 ヨイ旦那(だんな)ちくとまつてくまさい ト出て酒をもちだしけ。
さうらあきへつるびのよきまうけてのむ。ちやうどよのちまふたりしもまつくねあとうえへどれとまつて
「北 コレにしの

こゝへいうぞくくとおめつておくことこでや 「弥次 あんてく
「北 おれのこんじやアすんだ。にしこんちう。中宿新田の
羊ざへむさるのとこで。がりよのへそをおつてごらん
ごくをのりかかうこげなア。コレ羊ざへむさるも。こゝろ
安(やす)くせるものでんて。うつちやつておかうぞ。こゝにア
あるかぞ。マアどうなりふうんでや 「弥次 ソリヤアからうらの
こんで。にしもあつかうぞとこゝにアなからうぞ。あつこの内へ
むろざかり(嫁入)とよしかそれでいきおつくさはぐらや ざうさこ

せうへゑがコウいふとひきうとてつもないものを。
くれ日ざとしを出いふ。ふと紙帳屋まことんでや。
コウそこできるかいへ。モシ蝉(ちやう)なぞらがゑらよあるま 網法
さんざが。此亭(でい)主どのへちくとおやかぐらぞで
加(を)るやうれへ甘るが。是まで蠅(はい)とりめちよヲ。くんさ
ことへおがさんないふ。とふはりめちよヲくれせて口中(きのどく)
をひつけりひつぞろせてこまらせさどとあてた。
はだおもうどもめが。ごまでごとおりふ。落合(おちあひ)の

勘太さんが。あてにもならない。それから外へ出の
で。らんごくをやらかしざ。コウ一ト打ぎへ行やアおくら
中い。てアどこふあつざところ。平(ひら)のなかへ牛蒡(ごんばう)や
蒟蒻(こんにやく)ハゑいが。はらハあか丸じく。蠅とりめちよヲ
入して出のこんぶんで。コウきるかいハ。イヤその
そふしときたぐ。ソリヤアにしがおそくなってハテ
蠅(はい)とりめちじやア。なんざ。まで あらぞってこア
きてある。ひよく嬉(き)妻(ふ)ハかつてみざるが出まくと

いへハあるまい。その生麩と豆腐屋でするが。おかげで
ちそうに出たハ紙。ひさしく無理じやアあるまい
むかし。それならばこそやアないか。ひさしく芋ざへもんさま
の手紙。芋ざへむどのとこそつげる。おのれとも
中宿(なかやど)の正法寺(しやうぼうじ)新田(しんでん)じやア。役人(やく)でや。名酔(ゑう)て
いわぬやアないが。ひさしぶり。その中宿の正法寺
新田の芋ざへむさまの手紙。芋ざへむさまと
いへばようござる。それを正法寺新田の芋

ざへむどのといふとめんどうで。そこでつめていふハ。
正法寺新田の芋ざへむさまが　コレく　あなたも芋ざへ
むどのどうで芋ざへむどのといふを芋ざへむどの
ぶ。あの芋ざへむどのといふとあてこすりぼろ
いふことアならぬぞ　イシニヤサ　その芋ざへむどのと。
いふことかどうのあるよ。そこでめつて。芋ざへむさまが
コレきさまハ。今の口うら様へことをいへまで
いふてみるのぞ。えやく誉(ほ)めるをやう様へろ　イニヤ　そこ

どころじやアおざんすめへ。此理屈がどうもすめませぬ
「作者 アニまちがひはござりませぬ。ひろつた二平ざへもんさまの
の手紙其ざへもんどのといふことはなけれど。あとでその
ねてさうしてまつたも。むりじやアあるまいぞ。ハアテ
「見物 アニ権三郎が様子をうけ前やア。鳥がなきるる道理でもし
「見物 アニ権之丞がたのまれやア。鳥があちらへうつさるそ。
あちらも平ざへもんどのが。あとでたらアまつてござる
「作者 エヽこうろうなんのかのとござア。ひろつたが権之丞
さかのうちを。権之丞どのといふこともんざへて。そこで
鳥がなくてたもうあつて「見物 平ざへもんどのが。あちらへ
といふものござる。それじやアこじつけるろくさ。それ
で理屈がさとなく。サア因那いうさまかせと「作者 ふる
など称つうるよくつまろうくこ ハテト

二箇の識の中かく搭別

馬込峠

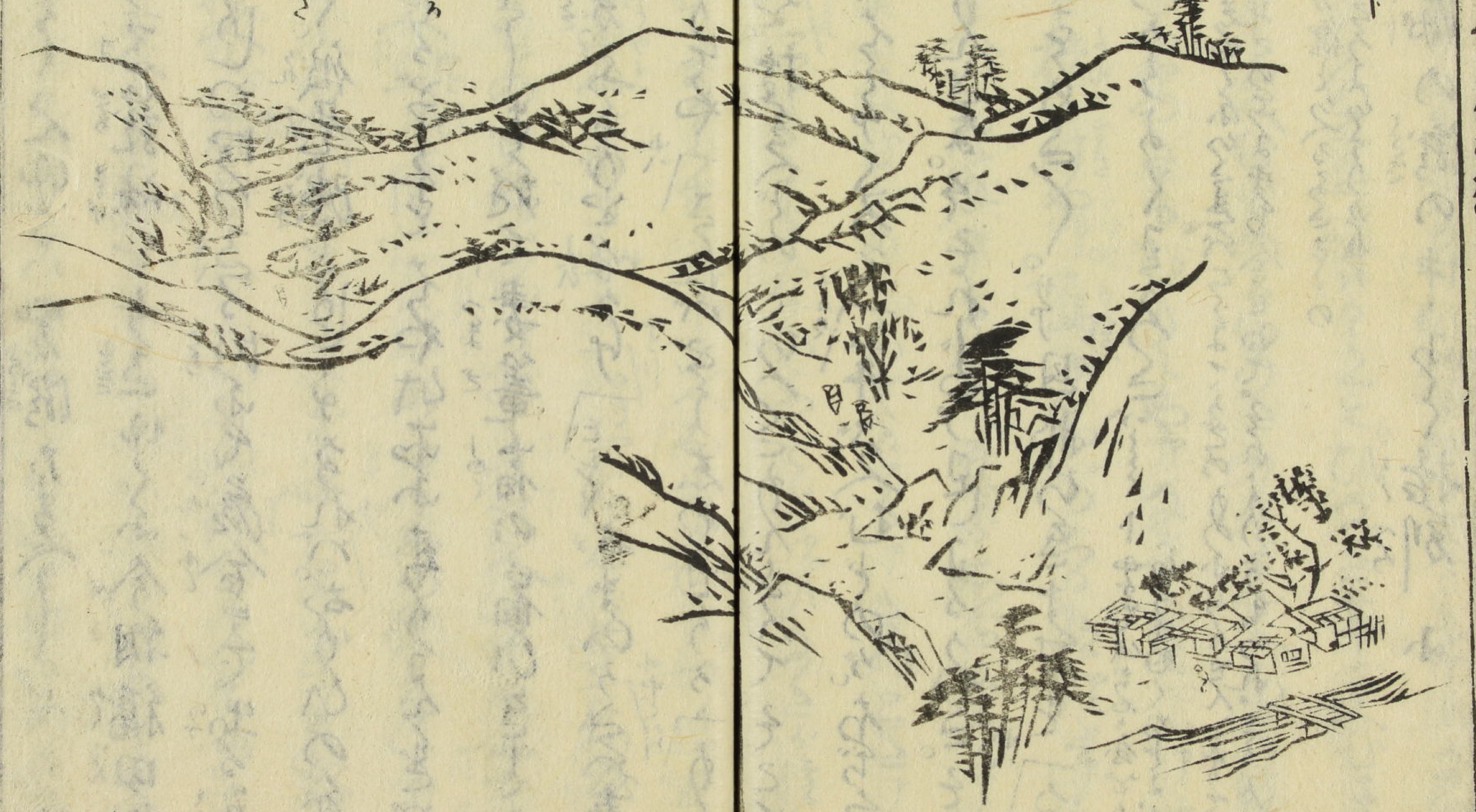
冨吉

き　鳴　山路

麿

夕ぐれや一樹の蔭の涼みゆき

式麿



ふとくみゆるハ男湯なるべし
そのまハりなる鬚髯をちまたゆくハ今朝福田氏
たち出られしハ。戸へ入る頃ニて落合まで出るた
まへごとく彼是隙どりしすまれバ。おもひの外
外の遅なるぞかし。されバ両ニまハりうんまバ。
七ツの日ざししきりて。妻籠宿の宿ひきしとお、
折しも男。ふうりを呼かけ「モシくおまいさん妻
籠おとまりでや 北八「されバどうしやせうろ 宿引「わよ
おとまりでよろしうございます。おまへお出なさいろ 弥次「イヤよろ
しうハ定宿がありますと 宿引「ソリヤ何屋でや 北八「何屋でも
よござるうちの世話にやアならぬ旅人ぢやアねへ
おさるます 宿引「イヤ己ハ宿にあくらあって来さかん
ぞんてもしおつきた中さざると 北八「それも旅人
おやア旅人ら宿のそろうちのりの。様ハころちのゑの
ござりござへでも勝手はゆくかきさるのところへ
是非さまるのやアなる旅人ともよろけもあるめへ

中どり「イヤこれハぞくに商売(しやうばい)がんで家業(かぎやう)がなけらにやア
しまつちおとなしやかぞかに 弥二「コレこういふ男ぢや。き
さまのやうな人ハやどとりにハ 北八「やアぞアぞういこん
でや 北八「ぞふいふすでさアべらぼうめ。きさまのがハ
が。どんな脳(なう)たれかゝろくに肉で、他(た)のものに出る肉ぢやが。
個(こ)しハきのふあくり葬礼(そうれい)を出して肉ぢやが。首縊(くびくゝり)の
あつた内ぢやが。しまも志ぎ人のものを 中どり「イヤこのふとい
こじいろ葬礼を出して 北八「エヽうぬが葬礼をば

しかし。おまへがするものゝ屎(くそ)ハこれわが 中どり「つくしい屎(くそ)は
これがおいにおなじつかれぞ。にしもされいろをるであ
いう 北八「しまつてござ。おまへさア毎日(まいにち)つまるへ。 中どり「さま
えあアがれ。ひねつてやるぞされどさア 北八「こりちやあて
おきやアがれ。おまへが屎(くそ)でおまへがたまるものかね
がせにやアなり殺(ころ)す。又せにやなうぬをとつて
えんやアがれ。よころはまつアえいつとさうぞ 中どり「アニこの
たわけやらうめが ト つらくかゝるを弥次郎ハ北八つきのけて
おのれへさまくゞへ出ると。やがて

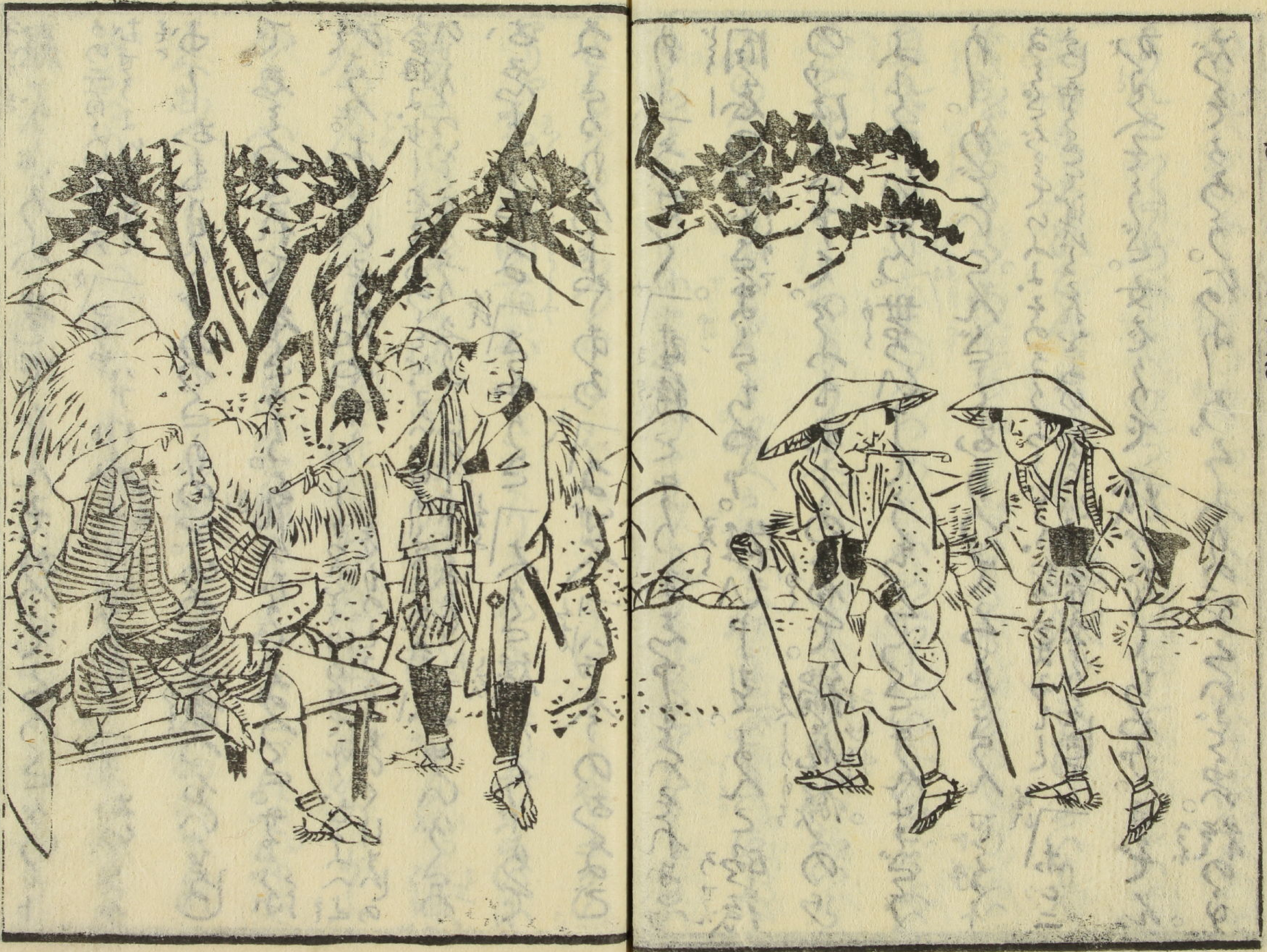
おさきあがりて、ぬれ
さんまうけ出し給ふ
弥次「ハイ／＼どんどうもあまりありがたうござりまする

往来の客へさてあれ宿ひきの
あいそもしめぎてにぎわしく
かくて日も西の山の端にかたふかんとするに。
ふたりは急ぎ坂をくだるに。そのころ十七八より廿三四までのおんな
同じやうな三人づれにてふくりの
さきへうちて出て思ひ出て 北八「ナント見る(?)。女の尻をふりて
ゆくうしろつきはどうもたまらぬのぜ。コウ
姉さんたち。おめへがたはどこへ 同者の中にてうつくしきの女

「アイわしどもは奥州から出来やした 北八「ソリヤア大儀へ
おまへ伊勢参りをするなら。よくも三人づれ。男もなくて
来なさろう 女「イゝ子すぐあとからひきう。女連の三人
同志はせん出来ますのでアナた 弥次「かうへいそうか。
若への娘よ。此山坂をあるかせるとはむごいこと。の
姉はうち。足がいたむすら。おつらがあぶなうてや
ろうろうトそばへよれば、そのなかのむすめどもわきをそつぽく
うれしそうに見て「ほんとうにそれはおさむいの女
どもへハア。そうでもおかさんがようつぶるの道中で。

ひゑへがらふうざう。なれやしく。それもハア。見(み)ども
はんこいくらめやて。アレ見なさろ。ちんだアひいて。
きせちなゐこんどアたれど。路銭(ろせん)がもとけまいりん
でおざるう。あんちうもくいても出あるいて。めとゐ
こんぞけり 徳住「そのハあんもらぢゝいめのごんぞ可愛(かあい)
ごとまでいくつかぐえ。あんなもう今夜(こんや)へ。おいらう
とらつあらのふをおう猿人う 女「アニハリ旦じゃもへ。にし
うちとぎりしもお宿(やど)をさりやをおてアなかうまく

めし 弥次「なぜく 女「生縁(きえん)ござりおそれはそれはハア。
同志(どうし)のごで辛(から)まうちやア。然(さう)ひやをよんで路銭(ろせん)
のウほうへやて。そふもあとの為(ため)で。鐚(びた)七十(なな)儲(まうけ)のウ
ようひょう。世話(せわ)ひやてうちろくさまんまぢア
り。めどハこんごとおりつてくまさん 弥次「トト
まそごぐってい。そのまりかうざく。いろさまみんと
さろじやうさて。徒れとふれをみびへおもひ。銭二百文ぞりる通て 徳住「ホゞ二
かうとへそうぐ。女だくりそ。銭がなくちゃア。さぞん
おそさろう。俗のかしろぐるよりのをくへむどまへ。徒(かち)のぐす



縫義(ぬいぎ)ごろしへ。是でなんぞかつてくろとぶらいト

右の二百文をわたせバ
むすめはいそぎて

「女 コリヤハア忝のうござりまし 「丹六 おてわいらが

おもて おもてへおもむくがあつくさめのぞ。いつそ意(めえ)つおいて逃(にげ)

で。あそこへつれて来さうろう。気(き)がなくなつてさ。サア 縫(ぬい)

ひさん。ちよいそれやせう ト女つれをうけぬけて行く。むこうへ上(あが)る縫(ぬい)の

合羽は。少しむかうのつきを。こいがけみしやる三人づれ。一人

ひとりのいとこがふりかへりて。縫之助に気がつけ 「あ ちあぶねへ。かくし

おれどもやる 「縫 さらさき 「よしを 大うさ縫(ぬい)へちかづけて

なさるめんじやあろ 「丹六 なぜへ 「よし清 ハテ今のおなご

どもがいひかけてくるぞ。わんまふらけてじやさうへ。

アリヤ元(げん)國(こく)同(どう)者(しや)おさどまりじやらいのおあまいふ

ござさとむさいかりして。縫(ぜに)のあまい獣(けもの)あそうぶ。後(こで)

ま廣の皮やなどふ。丸(まる)流(なが)れぬるじやらいのよ

ありんでもつんなさま。全國からおなごづれで出て

来おつさめの。それぞけの聰(えへ)がすまて。伯の中あ

なおるめんないの。それじやさうい。おまうふいよ縫(ぬい)がん

まうとおりまて。縫女さんしく。あつかふあをまころちや

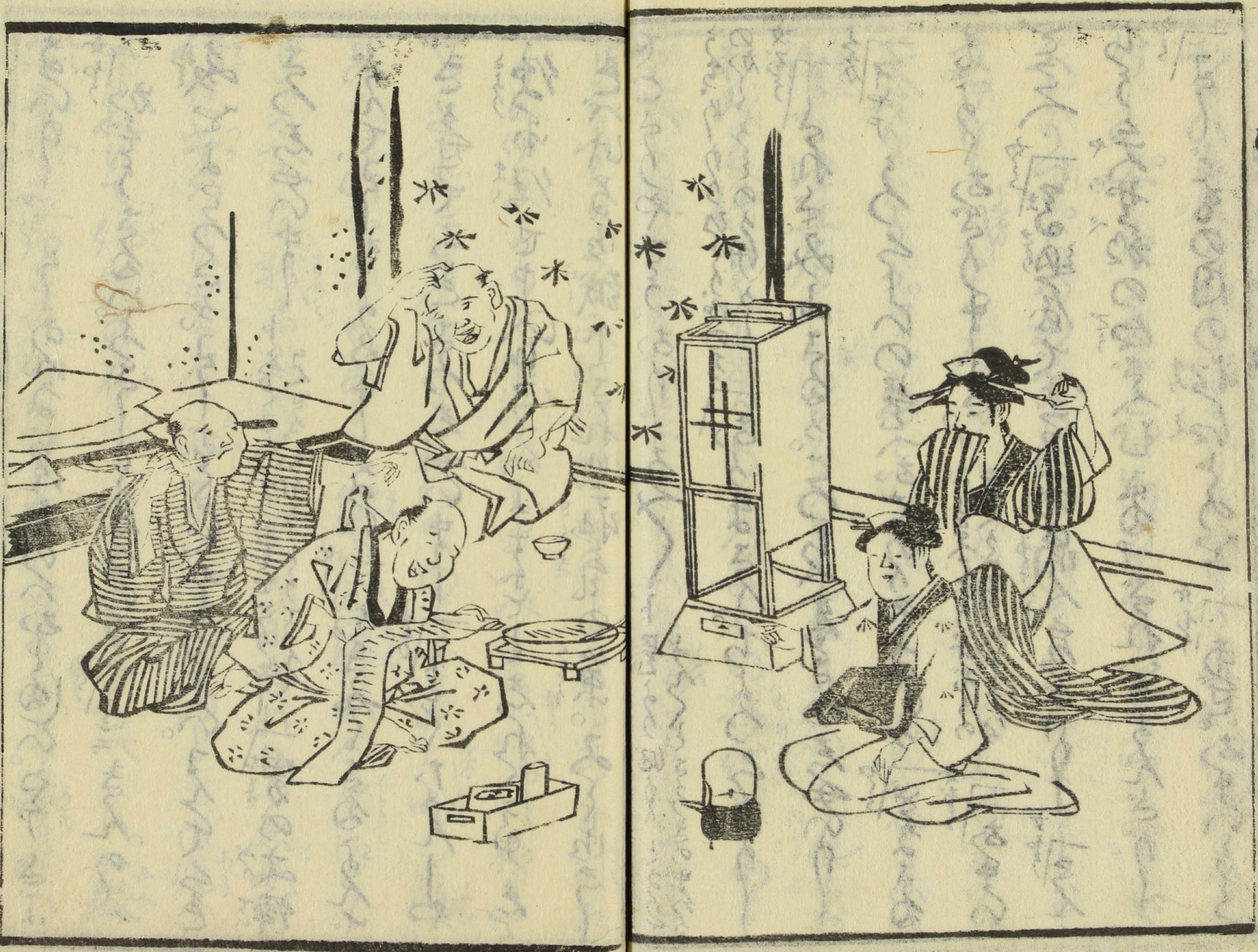
すいくハな北八「イヤもし。ぜんてへ此人ハ。平生まる抜のうへよ。
女と見るとやァ狂のす。いくぢのねへ人ださかいのるさ
弥次「そうさ。なるほど其通りじやァ業腹な手紙
出さいめへ。ましいさつけへして来よう北八「ハテあんまりお
そ。いゝじや狂人だ上方「ホヽ三鍼といふものハ油断のなら
ねものじやよういなア。鍼どもハ年中とかくよ鍼だより
ある所ハあるさかいの誰がござるいなるすって来さて。
ソリヤもし。そろりんよいなく。のよ八兵八「そうじやよかろう。

さうくちの手ハぐるそそ。すいなところで渡ノの一ばんよぶあ
されさんをじやあろ。そう言ハどこぞおもよりじや
北八「ありさうの店へとまりやせう。上方「そんなりや。ソレ
どもとひつきよふさまつてみてなされ。ソリヤありがたふ
もさくん。鍼者の骨頂じやよいな トけふされしのうち妻の
けバあらハのもろごやより女とも出てひろそる 女「たゞ今ハ。おおさまされ。お湯もよいのそ
ありますと上方「コレひろんさまきりめんがさけよるよいる。
こちや呉服屋へゆくのじや北八「モシその呉服屋と

いよいよ宿の様子〽上方「アヽいてえんなされ。ぬしらはいゝんだらし
めのぢあるこゝいな　一此内ゑやゝら女中こやのかどさきをまいられば上方めの
さきよまたちてぢやくしとそえる。する女のにきれい
なる宿なれバ、弥次も北八もちよつとまゝんと。おのづくさる正べ。〽これハ
そうの衆二十ばかりの、美さふうらしき女おうらいでゝ
おそおそりおぢざりましたさ〽上方「おまへの顔見よしくおりみて。
ゑらいそぢよそしつて来さるな〽女おく「ヲホヽヽ　おぢ
けくさるべいおつし香。サアおく〳〵おござりやしませずと
〽北八「十二おござりせる。すぐゆくなんも去様へうちつれくゝ
トいふ内おくのまへ行なりそこく田舎もいり。旅をよくも
ともそこそ。下女案内して。おんまのさてりちまり
〽下女「ハイのま
ぢまでおぢざりゆうと〽弥次「いゝまだちおつさア。さてハきさま
か弥ぢ女とらへおやまる〽上方「イヤおゑどさん。コリヤ
でけくゑてハく。はふおふさんでらふゑい酒が
あるいな〽下女「むりよふでこないゑいさけがおさくりゆうと
まんおかけ。モシおゑじさんへぞよりかいさ〽弥次「よし
どざりやせう〽上方「そしてひとつ一合あて酒の合
小肴なんぞとかうてりんせ〽下女「ハイ〳〵此酒のおつまみ
へ〽せせざるゑいのべいおこざつて来おりませざよか

上方「いゝさるゝよふだ。お客じさん附合なされ　絵師「こゝの人いろ〳〵でござりますと　上方「ヲ面白く　絵師「おもふ人がことが皆が出ふ。みんでもみな〳〵きめ〳〵のよふに八右衛門が様〳〵　上方「ヲツトそれできまりしや。サア〳〵女中。今の浄るりをおきまくまみ合さのこゝますと。ちやつとく　下女「ハイ〳〵ちやうどへましく。ト　ろうて坐つとしえらくして内の女おもう。まいれおちやう。つけさう　ひのほうこのを。さらくふゐれて。ちよおさてとしさうちうち紙おもち出
女郎「サア〳〵ふてゐろあがん。ませ女郎さんがくるへいんまおこゝびりふ出りましてが。ろうあへての舞で。そんなお客さるゝがおござりませんで。み人さるゝふやふふとりふうすいで。だおさと出の女房さるゝふとりゞの心でへんざみでおござりませう。　坊主「十二でおさと出ととろへ　上方「比丘尼のこうちやまの女　絵師「いやそんなら。女郎がよふへてうあつてびとり。たゝ様へさゞ。比丘尼紙交のよとりよのでるなこらふおりふらぶぬき　上方「そしてこそまと。竈どりらへ。りビようる。そちらはいんで来ませんせ　女おやう「アニサまんど。いろよゐるがおござりませんぞふ。コリヤ郎うなさま。

おまへさまがおそくなさつてから。此行燈(あんどう)の
けして。女郎さるがたを出しましたが。そうゆへで
ふとりづ。ふたりかへて　おあそびなさるがよからうぞと
みなかり「弥次(よじ)　なるほど〳〵。ふたりがはして　おやま紙
さぐりどりか。コリヤおもしろい〳〵。そこで見(みら)じやうまな。
誰(それ)も比丘尼は気(き)がないが。なんぼんでもよくさかい。なんじや
あたりばかりぞの　おやまさんの揚代(あげだい)は。おも
見へて出してやりなされ　あまよみなよ「北八　いかさま七さ
てござりやせう。おもしろい〳〵ト是より四女とうとうりて　ぞんぶんとさうがきみはかる
うちわりめりひもより次の名のかみのうげから「おやまさん。ちよつとくるし
女郎「それざ。み山さるが。ころちゞまさまさいのし
弥次「イヤア　うちらしの是へおへりですいか　女郎「ござんさるも
もよくおざりましたし。一ござきゝ女郎女ばうのそばへきてひざたてゝすわる
女郎「まま此座でよるこの商人(あきんど)衆ござりやり　女郎「おまへ
ぢやう矢野辺(やのべ)のがざへむさるがざれをよんだり　女郎「ごん
女郎「コレどもの円の松江(まつえ)どのを　女郎「あせ。おまへらく



すまいり　女郎「コレしあんなぢんちの人おとゝ図は。やアざ〳〵
女郎「かいぞうさるは。ふさうし来なはる　弥次「ホンニきんのふ
文をよこされぐ。コレしぎどいはよんづんへ。コんてきま
さうしやます　トふところより文をとり出し見せる。女郎うけとりて「男の文体
ずんてコレもよめましない　女郎「おきやてさるよんで
きかせてくださりまし　上方「ドレ〳〵なんじや。
経文経せやのは。こうれよむすぎと志れくさる。志ら
まべけるは誡下されは私乱の業。みくはさし
下さるべくは。さて又は瑩緯きへし中はてるみ分圓た
そりは由急よりく由流は下さるべくは　女郎「ヲホヽヽ
やアどよアニそんなすかからてあらけどふ　上方「噯と讀
みのふ。コレは和かしやあと縄は綿六尺中はそう
下さるべくは。我ふふんどしは世うにきれは佗急是ハ
持せまへしは罩丸の油にて垢汚ハるとも由流ハ
なされはて律擅の布巾にでもなさるべくは。若殺
系るまたへさる加番とるいてある　女郎「やしハア噯べい

よまつきなり　上方「ハテおまへも鏡(かゞみ)のぶんだ。ひなり
なのであるがよヲヤよめごさんはなけれど加茂とやらへ　コリヤ
おまへの客(きやく)で有ます人(おあうとうにん)じやないか。ミ人が親(おや)なし人が手織(てをり)と。
おまへのとこへお手とみえ(み)といちど知らぬさきんじや
さらば針(ふう)するちがへて。親父(おやぢ)の来へ来る手紙(てがみ)をおまへ
のところへふうじておこしたのじや　女房「やアごとより　源兵衛「コリヤ
おかみの所やとこぞを　女房「おかみさん。ちとおまへぞへぞ
ゆくさり　ホンニマアひとの喉(のど)が麦せへ　女房「まあ湯へはいりけませう。

おかまさるあいこどさふ　女房「ヨウく加茂さまく　女房「ヲホヽヽヽ
ごよせうござよウトクスくり　上方「コレヤ又こちへ来くさるお客
ゐとおりなさ　女房出て行く　「おまへさるぐこのあほ。らんまあ来ませ手と
めみあそべをなされまし　トわらひながら源兵衛もてうじぎのあけはなさひ。
そこらそりるつけ下女のろぞもよるごさふとんをもちてこひ・女房あれ
とこどとるとよふ・ろそよ大せいの女の衆きこゆれべ　女房「モヽく
女房さるゞくぶあいくさそうなトあんどうをさつきけし。まつくら
がりふなるとこをあくらぬまゝ　上方「コレく
ともかくすちうけ　源兵衛「サアくぐゞく　女房「そこへあげませぬ
源兵衛「せうひとりきあへ出てじや。わつとひつこんで。

うらんせ。そりやゑらいぞく　ト せゝらけていたところへ。三人の女房ゆうぎの居る
おこしられると。ここまでくらちどうこしよつうみ合。ひとりの女房をつかまへて
ひろつたる中ら。男同士ひきあへ中ら。又さわぎしまん。やう〳〵ひとりふ
ひとりづゝひきつれて寝にけり。三人ハおくの間。つぎの間へ寝る。
いづれもうち中とすれバ。よろこんでねども。弥次ハおへうこ。だん〳〵へうぎ
ふまくせこくとまどりましてそれべさてこそびくにあり。弥次ハそれと
おひしろいよくおりつれ。あげ甘んせさざとのおそひなんれど。これもよく
ふめうむさなりとどうろよるるこびあふし名ろがちむりくくまるしろての
ろうま大ぶかあげて。おおうコウわきちゃくも出来。よくくさけが。この家の
ていしゆもえ合外より　亭主「あんどおてことものいひ」ごこふ
ゑりさうきうとめて
よつぱらうてさ。たいそうなのみおふやにしもし
縁(えん)や寝つきざどうらういぞく　女房「ヨウうぐでもなる。

どこへいつて酔(よ)ぐらうてござるさ　亭主「アヽどこへもいきやせんが
となりの座たとせどやのおんぢいやらうおが。ヤレハア
ふたりのめし。坂口(さかぐち)の泥田(どろた)やでめろかゝりかゝゐて。
酔(よ)つくらんさいなアヤこ　女房「おまへよいきんでや。毎日(まいにち)
お客(きやく)ふうふ出て。ふとりもおとなりて来たいで。
湯べいのんでや　亭主「アニおめもゑとのものふさりつれが。
宿(やど)よおもうておとづらうとどひおうさう。頭痛(づつう)
と。こきやアがるのんぢんで。おまへ業後(ごうそう)とれ中かういて。

ごてまァいかめてやらざとおりつくら。コレしがらふ。ござされさりんざんで。ゑたや熊十が。そろはゝぶつころしてやらざとおつゝけくが。でとわいのえせいちからでほんぬけて志手のあくさけちらそなこんでや「女おや「よしふちへとまら志やつくすこ。二人へ上がさのこんでわらざとが。わとひくりゑゑどてそのよふぎ。のふあふアと「くらしめ「アニゑどかのでひくりづまら。ソリヤアふとり八色のすやへぢぶんぐりまゑこで。横小びんちよ

のぬけく二男でおつらざと「女おや「そうでく「ていしゆ「すんごふとより八九いびん袋のよふな頬で鼻のひらつてくらいやけでおつらざと「女おや「そうでやく「ていしゆ「ちくそつほうでおつらぎと。ひとつり出いてふつそるらいてやらさと　ト　人をごめぐるかなつて忽おろう綺女房う「ひとりむすめ「おろし母痺らつしあふんなのらふ「ていしゆ「ウニヤそれそせく　ト文房をよりそくはしけ紙へかけこまんとさうら。ひろらいとのていしあのあおらん母で。徳とのむとろイをまを紀のわそおほしりのあおれべおらく女おうぶそわてもきうさと大でゑとおけてをび如しみろろのくらみゑ。むそくしおくらう。せんろくより　きくる八ぺめ八分孫て多さおきつてみくりしが。足もむかとりのみそくろらまて手とみそ　おくそて　このゆきあそくて「すんごいけそよくじんさつき

うらだまつて聞てゐまべい。おいらがかゝあをとめうも
弥次蕎松めが「アニさるまくらアあるものをとく　トこんでくらひまくらを
おて。ひさまやしあるいはうぶつきあそうと。
ぼひむうぶめろを見。弥次郎小八の上へをそれる　弥次「あゝくく　北八「なにさ
来やアがる　トつらをつけべ。こちらもまけをと。ころくとあひ。おくの弥次の方から
ひこ人も女らもこもふ。こちやくおろ北八。なにへ来るうちをうろく　さわぎたてゝ
ふつまづきころげるやら。こをとおんをふくゞやら。いづれもおゆきひ
ろげ。九をごろふて。大さわぎを男。女なら「コレくおまへがたは。煙
うけ出て女ども。をよびたて
我があつてへ己らが。こんなをまくねげさるまゝへ
トよびにきたる。女どもはうろく　弥次「コリヤくいくぞく
ことあつくえつてにげてゆく　北八

が羊九をとらへていくだまさく　上方「ヤアちつまい
らいなア。コリヤあいうのおやまの。きんちやくまちとよくさ
上方ものゝ男「コリヤさうきまろう。積「積がおまへて。だめ
なろうが。ひさまさで。その積がどこへゆらいても
まよさ。そうおやらぬるんてくだんせ。おのさく。
イヤどこへゆくもとよからず。まる来ちつさ。おのくさ
く。おまへのてまてゆんせ。おゑいく　ト大きなこゑをあげると女どもあんどうを
さげて来りてみると。きた八がつらをあかしてみると。こまくらもかりつか
のまもとて川まけ。よろめのがらちへおきさ。ずんくおゐさるすりおつみ

うちまたやおへあけて からかみのつまづりひろぐる 女ぢやう「コリヤアどなさるもおゆるしなさ
アませうちがあの寺のむろのめで。おとのど
くでおざりますさ。わしも夜もあけ申し。らんしやう
頭巾とおげまでヒト下ろいつもを引つれて、ろうへゆけば、さるく ろうとらきつゑて、あつけにとられし
ゑんつきすり 弥次「コリヤアおりひげ様へ。大きなどを女へいふ
ゆゑ。拝んのうくども、なくはこへはまる様
そまくのおまての女房がくゞし
寝覚るそのちどり本もなし

よまり「ホン三 おまへがたのさつで志ろうめをいはして
あげめて。わしの一トつ主くゝけさまにあはせ
弥次「そのうへにまだ。おきのどくなるがありやさ。
ころちがつとめへ三なさるる。出して下さらうと
いふめのさ 北八「なぜく 弥次「ハテ比丘尼にどうあそんで
のほどゐゐ。わしの罰ゐる。出るをほのりじやア様
北八「コリヤア ありまてとさ 弥次「それでこそ。おまえが比丘尼
にあるくとろく 北八「べゝ 嘘をつく。そのゑへくゞる様へ。

比丘尼はおいらが所へ来ると「ヲヤねへしあさま。揚代を
かまわずに来る男だ。ばかばかしいあさまが所へ来て宿。
ちがひは縁へ「イヤおいらが所ばかり「コレくおまへ
さんがうきまらんせ。コリヤ変じやないか。ミのところへ
ひろいんさおかまも。比丘尼でもあるものを念仏はなへ
斎によばれて出くさるは。夜のうちに隠しまいと
ねらしあつてう上方のあつまの男ふうもなにも「イヤ旦じもひくふどやなるな。
その縁を摂くは。後のうちに殺罪ありてゐるそてある

に一夜でも枕ならべるは。他生の縁じや。今度也乾が
あつて。右の地蔵を建立するなどふなんおまと寄
進についてさまといひあつてるは。これもびく尼じや
縁「イヤこなた嘘ばかりおいらをだまかしか。ばかおうれ
縁へとんぶ「ヱ、きこえました。コリヤひとり比丘尼を
突よりよつてみ人なかうびくにを出して宿のかゝお
わがおいらをおとなしふうけやかかるのござふ事とそ
むつかしふたやアがつて「コリヤ上がるの。おめへもぬかも

さら経へ。旅のるすあづかる身じやア経へと。きのふ来
平楽をいゝかけが。ざゞしものぐ「コリヤけさいの
つるいトたゞひよんなゑひ合。ぐどよのさいちう。女おやう経をよみ出す。そのくべるゆゑ。ゑもなく出ることありて。そのことをいひ出せど。女おやうわ
いろ〳〵ととりなせど。ぐびひとりびくにを出しくりとだまりゆて。飯のあげねうち。ぐんがりゆて。なんらよ云いぶがふぐりにがしらることなれが。妙のせうこ
もあくられこれもろ〳〵しくいろこおがそそしつるど。せひあくこゝろよくそのあげ代を出し。そるごとをそつひ。あそく〳〵そとくふして代物をそ立出るとて
みんなまで比丘尼に出せど天窓かる
毛もない顔の女房にかくし
かくてみんなは妻籠を出て足をがらゆ屋の前にさぐる
さ道こともえるし合て ゆけべ。おとらり助くのるをひさ
まる男。此たる道ときてつけるは「さゝおまへがたはん屋道正寺
の比丘尼を質にかきくるあの寺中へ。びくにが来へるいも
ありあつて麦一升ばかりでぞしとあふ出おりまさへ「ハアそて
いろを五百文とらいあくましい前屋のかゝあゆゑ。今これあとへ
かえつて家主どるをこしでやろよろト ここにて上がるかやのあらそひ
あざむかれ。せんかたなくなど うろ〳〵さわいり ゆきさる

木曽海道　續膝栗毛六編下巻　終

續膝栗毛七編序

此膝栗毛。彼初編に乗出せし
ゟ京大阪および西國まで歳
通し馬に乗ること既に今
岐蘇路をさし天保里かけの
駄賃つけ弁と三河てかきの鞭

向ふ附出し小附とこそいへ。作者がかんの酒銭ぢやまぐさ年。箋編まし、お馬の貫目おさうざ。法王の口葉ゑふのかし美少と野宿。かしら物ま川まゐあ川まきてく。筆乃鞭あてども無しの追売屁。

満馬御免ゆるもどのかへりんなまこゑ。そのしらかい次事例のごとし

文化丙子春　十返舎一九識

越後名物 氣乃くすり飴　十返舎著　全二冊近刻

越後高田横春日町にある揚後なる翁に記せし西屋飴の一曲と世に知るよりおかひ付し新内節の西来毛に歎せしより本文出板して御求御覧あらん

版元

續膝栗毛八編

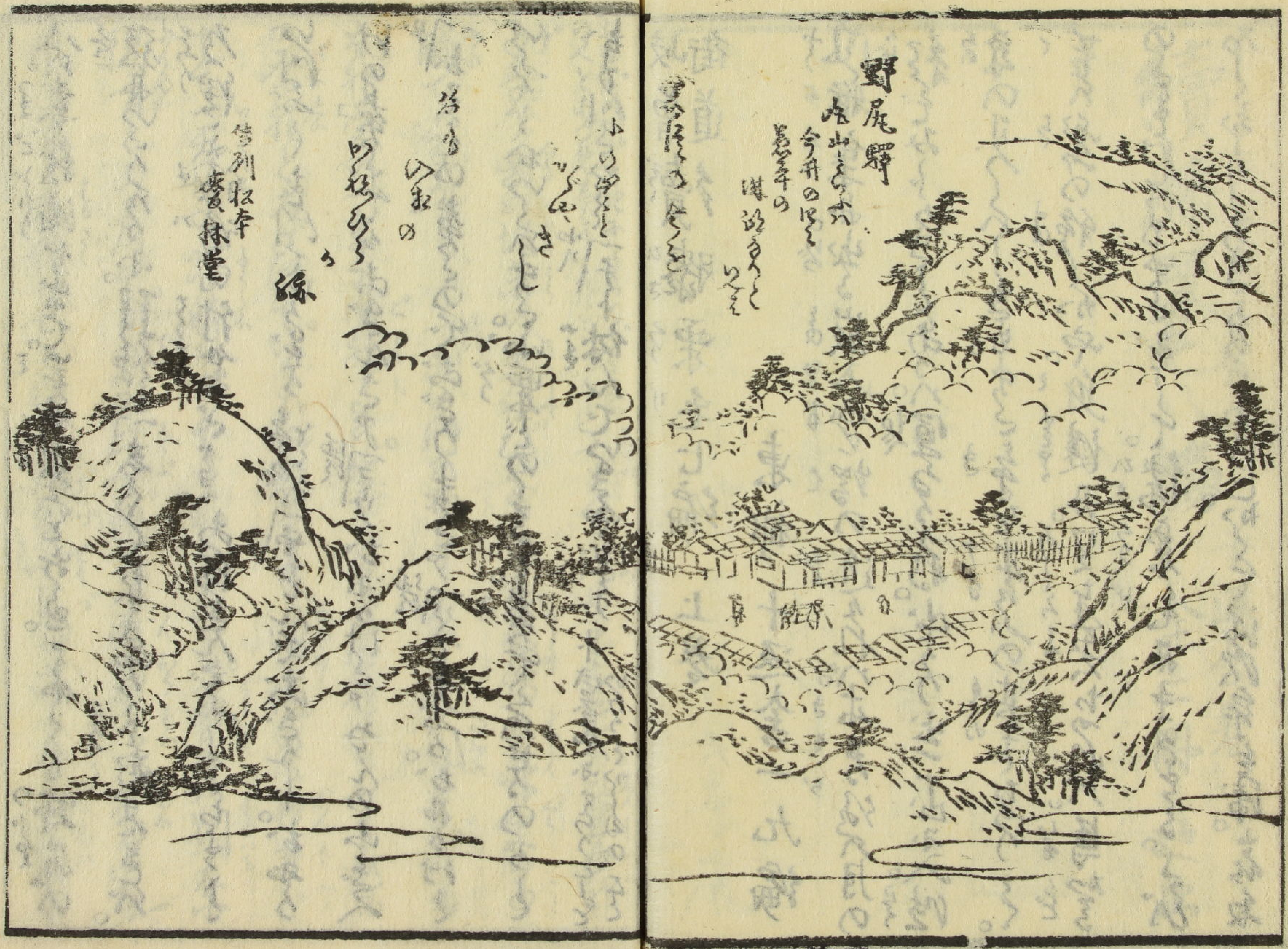
十返舎著

全二冊追出

岐曽街道續膝栗毛七編　上巻

東都　十返舎一九編

風雅集に出る歳入山の嶺の道入れば八木曽路の月の
影ぞみどりなきしあるは眞すぐなる。山より出て山に入陸
峰の見へたりしきも中々のことを木曽のかの基ともなりつらく。
其の樂の様しか中身續に見て建てる有つれば。馬驚
のなきけとも少々ぎして膝栗毛にまとまる。ふび
而くおもしろきかのいかにかくて語次第に述。一九叙


野尻驛
信州松本

〽妻籠泊を出て。美濃路をさしてゆく。まもなく野尻の
駅にいたるに。はたごやの〽きくなきおつこ見まへ。
茶屋の女誘の手招ぎヤヨへ。お泊さんでござんしよ。ちよつと
お休みなさいましござる。ちやの〽お休みなさんでおさんし。おやす
けの客さんがおざんさア〽北コウおやすみなさんの客まへ
〽おそなの客とのでござりまさア〽弥ハアそうか。おやすみと
いふなら泊まる小屋どのでるを見てみせるのかと
おまへ〽さ〽弥チト休んでいきやせう ト云ながらこゝの
かけつとかゝ内のこと

あまたのかゞみに。もつてござるは
の人とあつ先きたちく珍らしい〽さて廣めまと天神の神
なる日國の坂本の惣社ひよしの宮。康保の神なる
観でござる。〽北あの川のおかし見え〽弥さてかしま
吉祥寺の一年の中神なるハ七十二度の中神なりとゐびの
本名三光とおさめて。まんれおきくまり湯掛の中神まを
申て。天地の容躰とゆてまかりこさる者年に初天に
陽明くおさめて日照が六分地の蔵感の万が七分
風が三分。丸作が七ト分ありて大豆小豆が二ト分ありて両年を

稗ガモト。菜大根ガよし。稲作ガバドよかろをとおもつて。
千変万物生樹木までも。世ハまんく七ヶ年乃
間豊年うちハ悦でゐる御繁昌たのしみでもよろこびる
二腑かきなかぬともおもつて毎年氏子共へ七つの宗
あるしやう。さうよりハ子共の方にあらはてきこん風
来る風しより風。正巳の時より子午の時まで吹きるると
おぼる此風と言人ひとへの万民井通るしや。又東南東
辰巳の方に。赫雅星しやで生の三角なる星いづる。

此星おあらハ疱瘡麻疹ハまぬがれそうなるなんしか
しておるので命を長しく。鹿島香取ハ氏子共へ世を
金万ノ実樹木子万なりもかへられる思召をもたらかん
るとなみに作るゝ冬のなかにしく。そおゝひのなかにしくつてアまゐハ
まゝの皆人が数つてまつりにこりやおへもちしさけんいん
ぷくまふ為なハイちくしよ覚子さんト菜やてくのへ作もつのとりけるし
ちや葉ハちやアまゐりませんだきなれハお天気でござれ
のむだハ
ヘインチハイ。よいんちうの夕でよんどうの相ハたくさるまゝへたへ

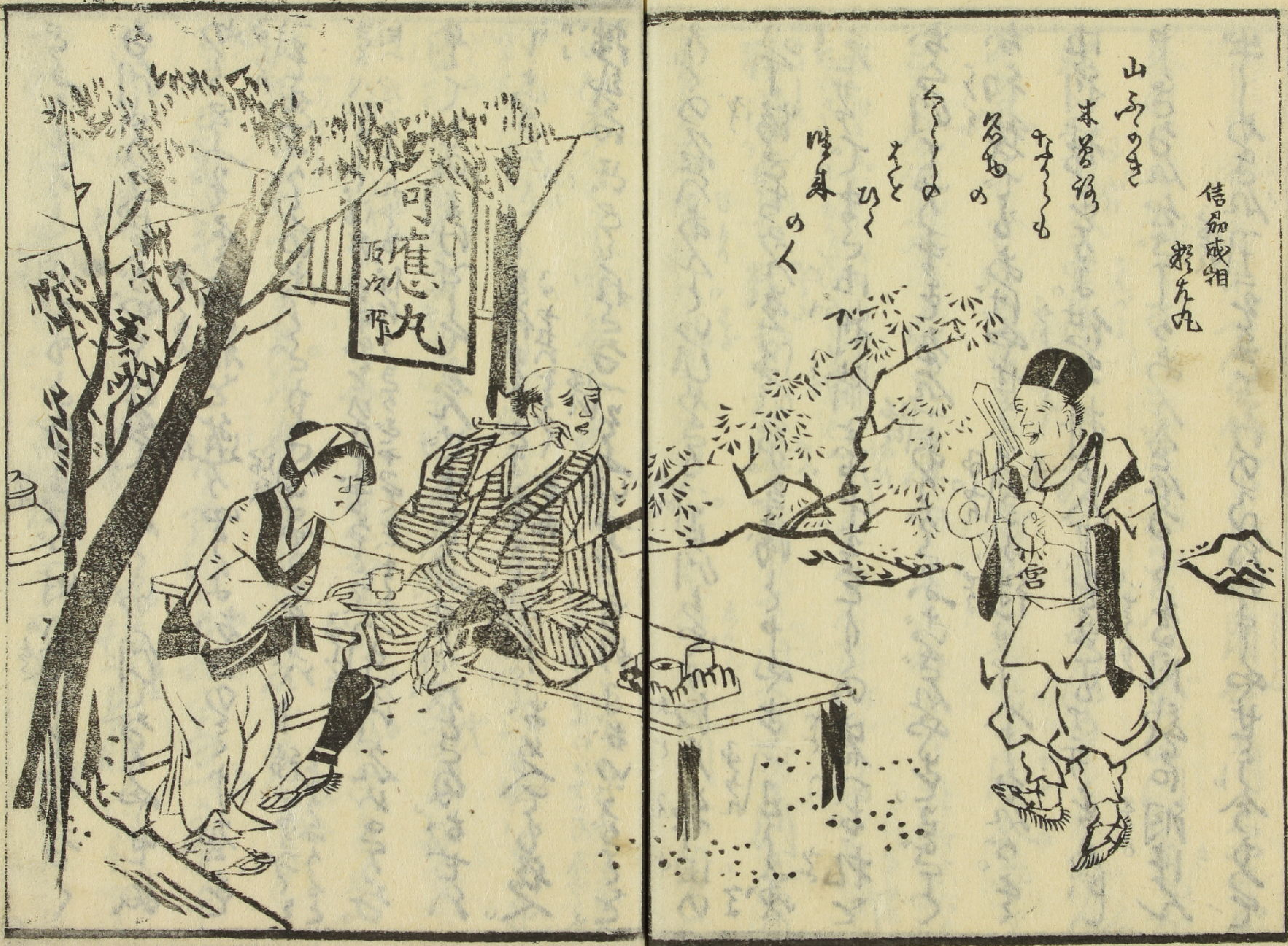
さまんまでござりいけまし。旦那（だんな）イヤ　着物（きもの）とつてきなさる。
そらし六十年（むそぢ）でござるから　旦那（だんな）おめへがさア前（ぜん）へ　出（で）て
なさろう。ぞんざいな遠方（ゑんぽう）へまで来（き）なさる様（さま）へ旦那（だんな）こうしぞのへアニ
ごさいらかとさア　ござりまするぞとすくぞちへお前（まへ）どのしや
ござらぬ旦那（だんな）きさう　さ。もうしましし。その男（をとこ）は星（ほし）が　あくるよりは。
ござらかんご様（さま）旦那（だんな）コリヤア子（ね）のとし。年（ねん）のとし。未申（ひつじさる）のとし。
かのぶ、その星（ほし）が　あなたでひどく　おぞんこ　もき旦那（だんな）そんなら
旦那（だんな）あちらハ。今（いま）の年（とし）がらや　雑（ざつ）八（ぱ）経（きやう）とらかんご様（さま）旦那（だんな）ちい

かさく。肆（ぜい）はそこ。これハひどく運（うん）の悪（わる）い人（ひと）でござります。旦那（だんな）さ
やうな様（さま）ト四門（しもん）の旦那（だんな）ハア　当年（たうねん）より六十までハ。
安楽（あんらく）でござるがア、今（いま）までのおぞんじのおざるぞおござりやす。
そうでげ。七十年（ねん）あとからまありかのよれくらんで病（やまい）で。
便（たより）がはからいで足（あし）けア　はつてなんるがおめへさんべんまき
旦那（だんな）コリヤ奇妙（きめう）。そんなるとがござりして　旦那（だんな）おござれろ。
女（をんな）の様（さう）で。難儀（なんぎ）さいまうにもあれさんがあれへ旦那（だんな）なる
ろどく。その始（はじめ）ぶつと拾年（ねん）のとさ。毎（まい）八ツまへめへが。

おらが隣の佐渡随が。旧冬への内さおとのるよ。おの
かゝあハ手めへも知つてゐるとほり。ソレ色ハ浅黒れんがァし
いきな女だつけよ。あの内か とちよろ流りしさうへふむろふの
ひやうらんやの後家つまつ又惚らまで死ぬのいきさのくい内て。
長病中をさへげしさてが あの内さ死ナア二嘘く。おめへ丹
ごまがわかるかのが 評判さるまをみ。是でも手附かへ父も
まろし。あをとも右んがでへるうの内さ一ナ二瘡瘍へおめへ
ちんさる時まさろうか。そんなうあだともむじうるるその
ちつとのござうへ沙汰かや年のよるいまこへものでもらんさん死の
あむさるが。浮く育つて今ではおんなし小鼻ちうへいろるが内
さうりそしじ流ら狂へ己そまつくへの相へかへるをめざが。
あれでも今のんさまとでへることとれの相ハア あんもさ。
見るらハまるとてるさとて福も吉るすと合る相ざ。
ア、やぞとれ人かさへその内へありがてへの風ま立ちるしき内さ
ふるつおぞれとてへ去年の秋時分。その七年あとふ
旅のつさ病気が出つとおちるコリヤア まへこのやうるをでへるんれ。

なむしく命もあぶんなるものじや。千用なさいましやうが
気のわるさ御てい、まこそよふがいこの久兵衛殿ハ気が
禄人の御子息子里店なれども手をきゝはなされん
まうさしその係として私どもへ二両金サア
こなたハ私やアまざんなれ。ふとのしれかさ ト
思て切さうなかさしらぬあと 御ていコリヤなんでおざりやすを ト
勝代ハ是で縁ちぐさ極まへして内儀もあるが御らうなさん。
まことの守れハ私をほけてよく信心なさい。

わくの名ハあんといひます 御ていこちやア江戸神田の
千蔵といふ者でござります 御ていまうし
元サアでまさ法新精進で其子の宿へお札を
おさめてまゝをるなれハ ありがたふござりやすとまうしまして
お初穂でもあげやせうか 御ていムシ子御サア入なされんが
法新精進をするは供物料が入やすまいアニ井まあめし
やとさるれバござらしがあんなる気のる同銭百銅はん
出しやさるれ 御てい十二文まで付けのるハいしやせう今まで


山ふかき
木曽路
なれとも
名物の
かしはの
もちをひく
往来の人
信州成相

ござりましと酒でもたんと呑ぬ時ハ舌がまはらなく
なりますゆへ兄がめくはせよみくがりしなりやせぬ
ゆゑおなぞを琵琶を遊ばすはおかしのさくや姫を
「そこまでござりまのおとゞかさへ「法然さやうなるへハト勝三郎文つゞきをまらふくると
きく八おかしく、法然の声をひきてうなりて「法然けふハ道に雨のふるをまとれども、法然きゝさぞやみてたまる
聞てそのよけでしてあんぜまを「法然コリヤなさる哀おせん
けふ参りしト是非代ゆゑにさまあまりて「小八ハテしおめへでも殺人
法然名呉てくれさる「法然さうかいる姉におらいきがてさ。

いひあてさうな空ぢやアあつかめへトのひつくふさうもどうとを出て行くなしよやがてこの寺のく
中程まで「法然いゝかしト喜ハ八幡も感ぐさせられる一日がゝりの舟。
目掛と家来になり仰ていらふ者やア拵へる「小八コリヤおまり
ござぬさの「法然そんなる今から先おまへは目掛ぎの手めへ
は風は口まづいたをいつちよふしてかゝるのでこれ「小八よしよく
「法然聞ア目掛ぞそコリヤきてハ八ツの日和さする「小八さうで
おぼりやまト高士法然くのふくはしてゆくよは責にあづれまで「小八目掛ぐ。ちやう
ぎ門と坊の馬この門で宜まされ「法然ヨイやまとくいそも世う

馬士〽たゞさへ川せるな江戸までも通し百ござる。おそとふおざ
らせるお侍さ身も今はお手と百でござらつ其さ　佐その世るるらさ
〽是もうへ侍がをざいぞの川であらう。弥次〽コリヤきて八
身どもそるまのるぞの色を法け宿へ　北八〽ハイ〳〵か〳〵ご百里
やしらとコリヤ〳〵る土お壽やうまき。をやくるを中るるれ
侍〽アイ〳〵　サアおさら川せ父ます。丠まのおまへおん壽やお
すおざ屋ご法けての川で宝きされます　侍〽アニ牙とも武
士でご藁でも節るくおさけるや川とめ川ぞ〳〵ちらき

男ござアニ武の弦馬やお甘う　まるすみござ　弥次〽まうさうころちらも
裸馬でかけとのる女のさまんる。弦住るる是もろく亦やア
今六せめへぞふまるかのご〽そま北八でもあぶんるん。おのうへから
のるのけ入ます〳〵　ト茶やの出さはあふせるぎを江よせてあてがふ侍その
士人あがりて旦那うる吊おのりさ北くゆく。あとのこる士
弥次のせんとをのせうぎのをだくるとひきよせるが弥次はおるだく世う
きみうへまの引りてるまのしんしさる附世いうしやちんへ立一ごそう
北八〽七つ八つから手習もれとききのじれむやけぬ
〽よう　ヨウ　北八〽やかく　ぞの川もう川さしれるり　弥次〽ぺいしく。ひんまう満んと
是也すかつぶる　ト世じも不足られむちう多ありるおのらん召そ世さきの
たしをぞ川とふまへてゆべおしのちからるせらござる

北八「ぶきをあけるは「あゝ〳〵〳〵 トくびをちゞめておきあがりだ「ヤレ
ぶさうさこられい　るゝとおれてひきおこして

コリヤどこぞぶちうせへすしさらおぶんなんざ 弥次「わしの

黒星所の所をきろくとみせこ アイヤ〳〵 八卦「今の子輪

めがおめへのことを運勢をしのいがそんちよ 怪我などもある

わみをとき十二運が落ちるろう我らでさらなくも大きなことある

つゞらしまやア拵へたヤイおの鼻まれさる此船のまへをを

ちうつゞらしとみて此所がかり〳〵なんまそのかうけ「あれ

ふきさア 煙草の葉をやろうのこんでおらぎまあんちくれ

疝気のむしを起ておきやアがつたからかんのむしやア爰

鯛みそ汁できつい咽でいきあつくかれ。ぶちがさア、あの

よこすのめがくぜろうまのせへまさる〽十二あやまやアわん

そうの子ゝ鯛きだやア弥次への口ツレなんとかいふ〽きうさ弥次

十里も一疋おとしぶい〳〵

さう〳〵 さんざ車鯛での弍百文

かしまみ あつで唯 そうまうす里

弥次わうおりひかけなく足をつてあかうくのことをきてこのゆる米すのり出ぎるが。

なくなる。まへおしのあんだんおしくゞとうまわすとうきそろふ出そでのり

どうおしく気〽

づらひるきん〽さうくど足がいらぬさうぬへ。はるかつて文おし、さまさう

法事の場へコリヤなるのさからだ弥次へおよそ気を請けてひん

てあるへ〽ヤてあらんぶうる文おとし出せおなまへ〽おくてまへあれ

とるのざ手めへ居眠をするかしいくゞうそまでそうふ

のざへ〽あちむつかれおちさうせへてうまつこの川でおぎら

せへ〽コノ盗人めがらぬ奴はるとまるだうまし。首がそろぶ

うるそのおまへ〽あんざへ。おおがほろんぶくつての首が

きびまさう〽まれとしぶ〽まるの世へまし〽コリヤく

ごきんじよ〽めつそうな事いつておどかしなさんな ト喜多八をうれしがり二三足ひき出しかけ
このまゝをさしていつそ上方へかけ出して、るるぎおもひきりてまくらをひきよせいぐを〽なんぞ
まめへどうでそなたがこゝなのをさしてきるところ〽アイモシもし
命がけだア。おまへがお門どろぼうにしても首がなくなりげる。それ
ぶんまはやア。これの宿まで。此お身がお門どろぼふいつく
しよ船のいびがおぶかう。そうおもへつせへ〽イヤ此やろうめ
さんざらしとりよ〽それでもいつもなれども此宿
まやアもうそんなものだ。ぶぞうとしてろうけちやア。むしいら

なん田舎ざむらひでもお国の産のちうをとめないしやア
ならぬ。そこでやアいくらお門しまるとなかなか追はぎへ〽まやく
すぐにお門どろぼう。それはそうとお首の気くろう
ものだから。そうるまへとおりませなさ ト あれこれそうやかましいとなるをそろそろと
ひく。弥次郎兵衛とこゝへ あまるをきて八おもいよう〽あの馬までめん枕をく。
きもから須原まで八きまでまし。晩までからのでもいつく。
そういうゆうをかべ〽コリヤ上船犬なんでもくへ〽ちやうぬまじだ
そんなにとてもぬかさないでなんだ日がなかげんしもつて、物のある旅人。

サアはやく中〳〵旅人が〽（高士）はやく〳〵やつと。お川こゝろぶしいます。
〽（弥次）ほうかんしやア此まへ旅人。今お川を見て（あし）足で入たし。千
まるぶたうい。め人ましぬ。きうき八手め人のゝ旅人が。おまへ入りよ
おりやう〽（高士）一寸先を見をあがらせし。東山東の私めがでござ
して（ごみうい）南向経をなるまのしきやうすが〽（弥次）こんざめね
おふ。小おれがきこおつころんでも不當しそやわらう。
まづ〳〵とよまゝやさしく〽（高士）エイ怪我（けが）ァさつせへでもよ
クア。はやくやりませぞト　きづるどうぞてるの立べくとむせうる
〽（弥次）そこへおうこうるしとるへやうるる

かけ出せ。紐をゆるつがよ　まつりとづつまり谷から〽コリヤ〳〵こいつよ中せへぐるつしやりまく。
あんまりのりのりをやを汲て尻がひよれつくおどり川でらく〽（喜多）
でありゝ旅人。すよち川と喜多川かふし旅人がト　いつてまつさむ
〽（喜多）ぞろりくとあぶ〽あまりおどく足船の尾が淀よれ〽（弥次）てまんなふ
（あうさ）八あうしく（ぶんろ）（どんぶ）
雑渋谷めよあふかのる土にてかげんはし旅が（まど）
此の小せん馬まく喧嘩のそでまづくよ（せん）（みき）
首をかけ出をるのおやうさ（くび）
かくて此の川毒よ。うきう忽大鳥ひとるうそ。馬も

法師のおかしくひくは。おどろく須永の数みいろと持
尊の茶屋に。いるをはなげべ。はな節ありもちてまへ
休む弥次「おはなが女川どろぶかと。コレ肩衣がくれなど
いくで、できるんなもひそしこの。ふ見たお弥次はんぶあふまへ
せつる。ソレ駄賃負ふぞ北「アイアイ。コレとての女房ざ川ら
けのだ川さ女房がのへ。まんぢう独尾の手紙屋へ鍾の女房を
ぶりつくれと。序があるべき川でまってくださんし。いさ川
せへとろへ。まつしとへさんてまく。ちろさ母がまってる。見申せ

女房さん」ト云ひながらいきまして、コレ弥次さんの北八のくびをとる
そのちや屋の女おかく 弥次「ハハハ
ろう見川でさして御手くさし。鍋のなかにおかずいろいろと
かのぶなは。おらが川も出来ませ 北「ハテ 業をらぬおかたて
けれくの見」トゐるうちもゆうみつけるがうやがてこの茶屋をたちいで
ゆるゆると大亀宿等と打過ぎの瀬戸を越えまちとて
落の里 山も ぶ川さしくいきかひれ
山村の ゆ川 おのし 瀬 ちうまき
それより寝覚の床延びにいたる。此ところ蕎麦切乃
名物なり。中にも越前屋といふは 旧家のあるをみて

名にしぶ川のそゝぎきりよりも旅人々
むかしを見るに卑毛のぞしやさく絆
咲しおろ舟。清川寺しらず宮槌あり。宮雑覚の唐よりて
まさにあり。むかし浦島が。釣をたれし所なりと云伝ふ
浦嶋も如くけしきの葉なれるゝ
小役よりも法里や こゝまでん
かくて先刻塗尾宿にて。一疋の馬をとりたる侍あゆく
に追付。あとふちありされまるうて弥「此船はおなかへ見く

どぞ。おひとりでおござりやせうか」侍「おら。ホンサア出来申さ
財は、ひとりづれで出来申さぬが。大坂蔵屋敷に。法皇の年々は
のど御やかましくて。おくらぶより旅も一ッ」北八「お国はどこでおござりや
まづ〳〵御列でおざる」弥「おひとりでは旅ござ遊でおつきり
やせう」侍「きなせちなれもんざァくゝ。やんざァれども。あ
まやかりも。まだゆうぶおざんなれ。わしさちやァ。江戸
わめざる」弥「さやうさ」侍「おらも ふさしれ むかふ衆じやァへ
法ん出来申さぬよふとふんやるさとまし。今ぞも先く

旅人の
高田
髙橋舎

又サア それだで あんまりおかしい 談「去年芝居は。大きなまた
やりやうのき 侍「その志だや サア あるときは あんとりいふことで
あるいはとなり 沖「さうなり所久 侍「イヤ あんであるから 屋根や
所もし 沖「茶屋孫や所からもいまだぎりやせぬ。りくア 肴や所
ク孫 侍「ソレ／＼ その中村や所の市村ゑざ衛門の芝居サア
座役でありしは志。さかんなよいきやくことがたびたいさが。
その時ゑんじめて。志だやらいふものサア それやさ。ア 武士の
お芝居りんでは出ざんなれ。業がこんなやまれは 談「なるほどでござ

里やまで 侍「イヤその時。沢村宗十郎といふ役者でもが。
侍するので よんどりんぶかので出来やさが。ア 人不の為は
男かしぐ。それからと悪人ぐるのおんとらふものが出来
ての侍し口論がもちのきびしおつくりしてそと
でその侍がみづからをさけて。きてはけをとつかぐやく
その頭あたまく出来おかので。侍をぶちまへるが。みずも
見物をよろこばすと。業が出てくる。出ぬからまたおかけ。桟
敷ともびし出来て。コリヤくいふ狂言でアござりでうぬ

くゞるやらうめが。宗十郎へさあらひば。侍がたつたと
さげてあやまるは。ア、浪人者な人。あぜまがりに。
侍ハあひてこそがくそ。是から宗十郎の肩へ手をも
かけるぞ。サア うせおれ。身どもあひてになるべいと。
まへへいでし。ぶちたゝまくれ。おらがいまわしひよ。乞
ことおいて其の悪人があく。ちからぶも合はせん。
おんからかじる善のがとふ門でかくや サア へいはん ぬ
げやした。身どもそれらしまぐこでも上之屋サア アんてく

るゝがおつざんおいぱ。かるく行がいまるのし 上。武士のうちわ。おげ
みろの事をきまりる。おもしろく人をうるしで。うろくとまわりやし
た。財布まきて八さ門きぶりこ見がぞふもいくんでおう
弥八ろぶまぶたまへぶ式宿へこ急まくまよよ一つて
太ろしくれ。かよ手まるのろコリヤ又事をとる一八イく
門し手ちこ急りめぞるかゝ。おらしも門まてこ急る
ぶるりし 一とんなら出一あるよ ト やどやをとりて あるき。
ふきのるく。女 一おまかゆうお出なされましと ト でかけてくる。

さすが弥次へおしとおらひてあがる。弥次もあがりくちまでくると、うけ
ながら、きた八のもるのさきへぶらんでぶらく　あとさし出し
弥次「コリヤ脱ぎかけの草鞋をとって。あしをあらへ。コレやろう
め。そのやくはおら八弥次へかトゆをみつけるを　弥次「おんまりだから。おか
みへひとりではおもひきせまる　北八「イヤとこのや主人は向い
く。みなで便をまもり ト北八まづきさこれやぶやの　北八「弥次さんわしよ
よしやせう。むかしにしも主人がもまさまずぬ ト 弥次もよろしも
さきへおしとおらひておくへゆく。北八もおかしく　宿「サアくおまんへ
弥次「コリヤヤぶしぎの出縁でおお宿いへしやきまぜ。コレきう

八ござりまし。かのぶちめんしドて座へまゐりて。宝作法る
やじ「手見ねござりませうとしいふは　弥次「ほろうじまかせ。縁をと
いふかのへ。呆はこゝあきさがありて。みるれどぞんじて。ゆき
しておくく。本末めぐあのきそうな安どでといふきまき
北八。まるりたてまきり ト北八よりてよの　宿「モシお湯は
おかしなされませ　北八「サアあるさ　宿「コレしうざ弥次さつさ
さの弥次へまゐりまするとなれ トゆまへゆく　北八「アイ弥さく さ理ござ
只がありそふはやくむくおまりて。コレみんやま。ぶがりく

西ぐわんさまはなぜ見へぬ。なんでもござりましたとやうさ
おかみさんが。ひつこんでゐさしやるゆゑ。コリヤ法事する弥人へあし
く。あたり鳥弥へ大変ぞ。コレくゝ出て見ろ やくの女がう
ツイなんで。おがたりました モシ番頭湯は洗湯ま
おさめ人の弥 ツイ今のさいまで。こゝへ居ましたが
ちよくくよびな。かつませおそろ ツリヤアござりませんと 家
ごのそでおぐさんさア 十二弥太とぬるのおやア 弥人。あし人へ湯
湯をあてるのき ツイ石がはゞこさをとぬる。こゝア上手

ごくひきとがつかあしをぬりのへどうので あらぎもつ 十二もくを
ぬりかのう怪気をとらうまでと焼いて。おつけりのさ
ツイそんごつてつと上ぼりまを生まれは焼
てあげませもぎっしく君どうもとが焦げて来
ものかへまつけてかうだ重くして旨味なろう
あまさん人へツイ出来んなるさ。重ましたの 金魚切
病お目のお薬へ名剤でへおざりませんかな ライく
てうどいゝ所へ。ユウ足そろたすきかなんぞ 膏薬

長岡
金風舎

猿ノ孫〔商人〕ドレおみせなさんし。ハア背がちくと出し下げておかつト

おしのところをさまりかへ（ぎうぐうとさすりまげる）〔法印〕あれさ〳〵〔商人〕いゝ此とき〳〵此所で

ぎんし〔法印〕アイそく〳〵。コレ〳〵背がそれる〔商人〕ハテそれから法印で（ジツトシテ）あげ

ますると〔法印〕それがよいので。そのまゝて法印するのみなる〔商人〕ナアニ足の手やら

二本。ぶちとれたとて。さほど法印自慢（どふしやう）するりんでなるなあるの

きうりん。ぶんのところでおかしいぞ。サア手まへでよく〳〵ござりまさアト

りみやうげ〳〵かけ（おさへるとふりて志手引）〔法印〕ソレ死風をひかぬやうに。足袋（さび）でもはいて

おざりませんか。ト法印まくひろふ（あきんどはいる）〔法印〕おゝすゝ紙おくだされ。揚枝（やうじ）

ぞみかき。足袋（さび）手ぬぐひの法印のよし〔法印〕コレ〳〵たびとりもなく

えんなせん〔商人〕ハイ紗綾をあげまするで〔法印〕十文半と十二文もと

〔商人〕いろ〳〵であげませます〔法印〕イヤかうろおづゞぶ。コレ此ちの足くび。

かゝくが十文半。かうろおまへ十二文〔商人〕ワリヤござりしで〔法印〕ハテ怪我（けが）

そんなかたくのおしがもれてみるから。それまで十文半と十二文

ところでそれ〳〵足袋（さび）がおしい〔商人〕それなら評判（きゝん）で破るところ

おぎんし（ずいぶん）〔法印〕それは国本の手自慢（いるゐ）（じまう）。江戸まへいくともあるまい

〔商人〕大こゑでさそへ〔法印〕そんなたおくしんさびがするあの人〳〵まちさか

孫へそんなら手拭でも。きざんでおくれ ト云ひながら中へ入れとそろひきまする
ト、みんなのおきやく人が出て來て、此内さうそうび湯からあがり、ぜんぐ入れて湯から
またそれが、しもさひきまひ、ちよつとぜんまひをそのお女房をあいてきまつり
ハイおふだるおあげませぞ。モシ、おまへさんでさアおさびしから
ろうよ女房衆でもおよびなさんせんか へ伊 ゑぞも志のさしふ
するが。ご門にでもお暮らくサア。ソレ門さこそがあけなし へ小八 ひさせ
ほんで出ろうじ中せへ伊 おりやしれ。おらてふくり縁きろも。老
後のおかひ出まそのも持がありでもなくて。コリヤ婦がら。
京おかませのちる子。男女法サア探索してぬとアとて乃

お暮らくぶんだ兄。おのびなうおらう出まとだ兄。ちなみ節
おらをとみそでぎんがりと流る門と出うごりしへいへさんがら
おのみと。あるゑ入出し中せぞ。おまへさんがらへゞふ志うから
ト言ひちうがさがりきゆへ小やゝ子のあいさつしてねるまが女きらども出しまう
あつめてさらど三人みがら。よお作りのまえらずん まあまへ。とんるハ
か門そへとろうゆく。志づらくして待のちうかんのめしかり。名ハおかひもどん
ゑへじ女の志をぎのうへまぶろうじ女とすきて出待のそぞくきそ さとろう
へよくお奈ありなさんしさへまづ入う門くしれ。此羽ありやらう
わたが孫へおらてあの婦がうをあけとう人の懐殺かし。
外でどれもの門てなきさんせう へリヤアおさびなのし へイヤ

おかひつけさしよがある。コリヤわし。猪牙へのりてくの亭主
逢よくいひて呉さんせう〽あんどの〽あんでもないぞ
悪く聞く　ト　なきゆくし〽おゆう此身でおざりませぬ
〽わし　それきらが身でもがらてくのお志やうくサア。いや〽だん
とてアかひおいとがわしはいゝなれとてアどうもなれ。一夜でも
おらくそだ気。縁ありおりかんざし。おおやらしさまんでアノ
ひくれが。ひよいと心ありさひもんでもなれ。万一悋気でもいく
しさいて手どもみて構はぬとんだ。わし承知だんべ

〽コレサ此今ぞのしアニ女郎衆よ。そんなこつアおざんしよう
〽みんなさてアなんでもあんなんが美しい一さうのとしがお
つる身は。身ども年去て。まぐこぞりくきらくて面皮よかりめる
さくもり。コリヤアやんざア。やめよ志やうを悪い小八くおいとぶりしぐ
へぐんく。ナニそんなこてかまうものでい〽そまとも。悋気のはと
ても言しくなんとぶ起請文でもかんで。法ん出来と気がるの
〽イヤそま一人思ひなかの。アニうつし承知して。おまえばよくぢぎ
サテ此のさア〽わし　意気請合かく。そんぞうくれやく。おまえや

らくサア。よこしてくれさんせう。おらくはかりよ。そんなりまちとなれ
〽ゑい〳〵まあつちへお座りて。女郎衆が来るてゐなさ
よ。たのしくどなりで。おかみげなさんし〽へいねさ。ドリヤ参り
そこな ト かゝるをあけてのぞし きく娘子ゆく〽こゝはなんしや。こちの八の女
郎衆ハ てゐかゞり〽アニぶなさんぞ。とかくしハかりふ
おけつちやア トらひまそて ゆき〽コレ〳〵さよまるのご。おいらま
おけくらふなる。なんのとりさ〽あんのちんでもなん。おのれらさ
出さしをら女郎ハなん。コノ よこりのでもめが〽十二さなうも猿へ。

大 おいらは出まと女郎がなれさア。さんざなどがとぬかさと。
の紅の涙ふか絹もおいらの絹も。おなじとこぞ。女郎
めらと出しあがらぬ〽コリヤ あんまりぐざるる。観代こらう
ごまの灰が舎人者のおしとぶてい なんらう おのれらが
目をくぶり。此ちぐん栗眼でめつけておんさ。あるくらふと
ききおが何で。ぶあらなる。あでともなれとぞせるし。
喜助は泣く大てきうけ出まとぞ ト 大ごへをあげて むせうにやきもち ふくれいらてうまぐてんなるぞ。
大きな男ども〽コリヤお客さまを何で。ぶて人出すぞ。此やろうめが

喧嘩
出雲崎

弥次「ナニ跡のことをとめえをたつまでがお侍さまぞうら。が川ちがひて
あれさがかふらがうちよれくとてあるかい安針られるを
拷ぐは来る。出ていけつちやア。おのれてとせるとうちの名歌
とおぞく来るハ北八で出く又らま強人へむさ様のうけをひろハせ
てやろう　　ト泣つみつくんくまる所へ女がうそじや弥次の力のどもうけ
きてゐう。我わうとおづめるのろくいこれハやくの口へ居ふさ
すその力のどお多のたいとおもひて。かくれいよ方のそのうけらふへまでて中
中口と多の在いとらふ力の小者すよ死ほひんと又きんとめふ口ぶて主人
と弥次の家らよぞうとくらへてあるくこそある中川まで。かくちぞうのハ其形
て彼の出らら又加れども先でハこそぞうなおいきうやうだいのぞくらふてく
ありて。かくちと云てだくつのあハざるをゆり。強あれさる人ハよく口死出
てあるまくのり。弥次らまる八かくるうけハ来るを其当を在の夢れよ主

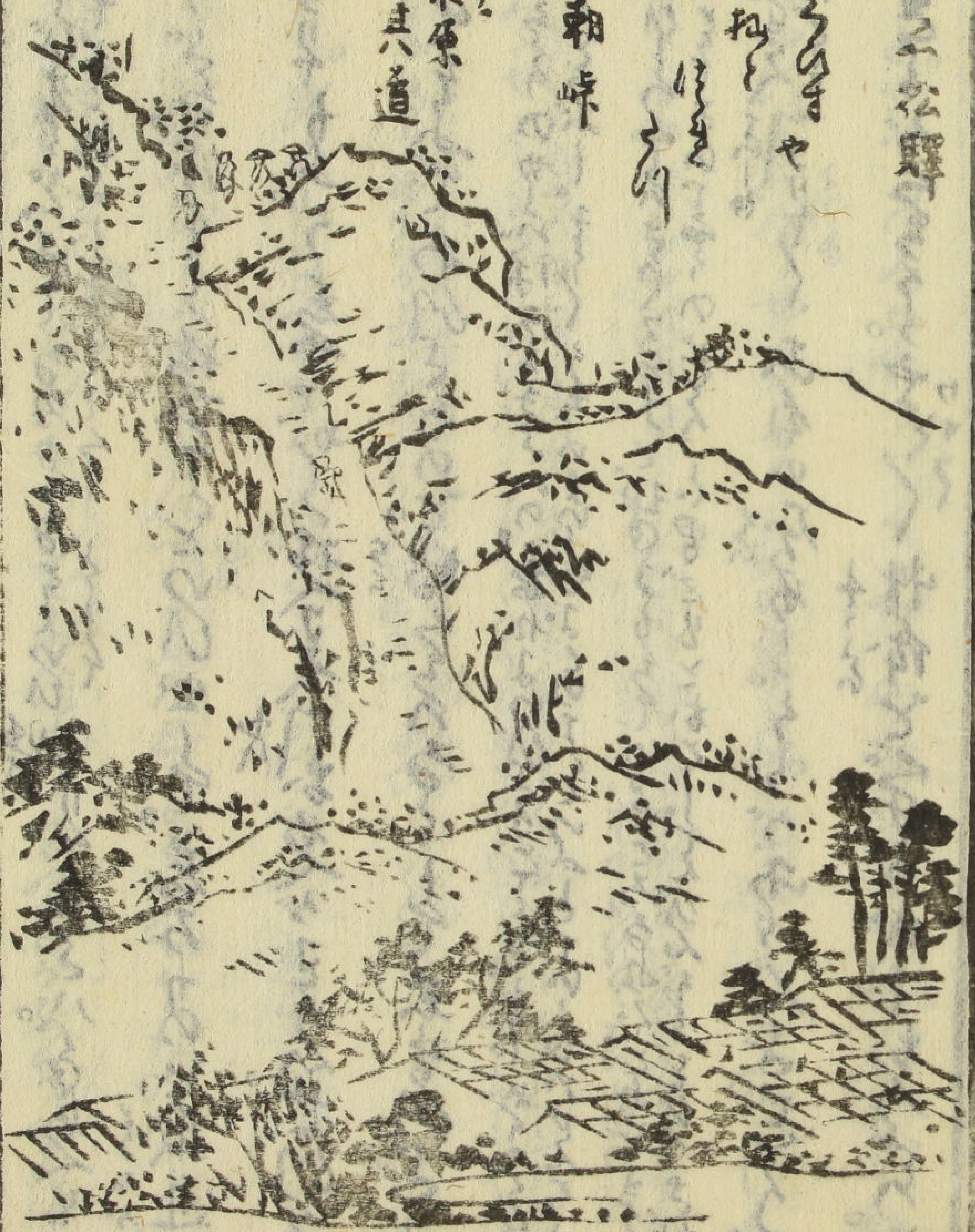
弥次ぐくしくるが侍のまくと八のとくくぐつき。ぶん名の泡へむろての出る
さい。ぞぐ口主写ちるれだ。ちいへもこれときうてさてとぞ上のたいく来い
まりじて。この元ハまくろうろうちり。されども石くりハ身んのおすも名役を
ゆべくううちてちげんくハくうりうが。ぶえぐや家内のおのおぞり来ぐめ
らまで。ちいものうとが八ふくうの石ぐさみかくらてて。さろえろくとえ
でんも。あつとうしるとのうくあやまり。あてれらうひくるうきぜけん
るどくふとそうそうねあハせし。女ろうの出をつもり出てうるく。うそ
のうらハゑくとやぐそわくもりろうくり。ひくろのゑハおく多。ひくろりハおなぞ
おろれて北八あちゃろも強く。ちての宿縁めが。おいくらるをまぐ多
出きらる
の座ぐさい川でおめへぐさの数とこんおとよ幸まよ居いろ
あぶ強くとくの北八そふい川でもあんまり太うがらず。でん
幸めぐやア強くの主川見しとくの其形さ落ハ。おぞんれむきぞ。

忠臣おおさまよ。わしァ清門もせまるとがくそんぞはさァ
あくればさんしるぬ〽お房 おなほさまのへ。こしのへまでがたれなん
錦をきるとおそくてやアござます〽お絹 おきのさまへまや
く出まへおもいて雨降がいれてなろうんぞのし〽清七 それなら
もよ孫やせうの〽お房 ずいぶんけど。おもこげなさんし ト よぎにくるまん
とうりよゆく。清十郎のそばへよつてくるはおなほ。きく八のそばへきたりしは
おふさ。[illegible]おなほのくこはそれぞれまどれて[illegible]
たまきよのびて。ぶさうの〽清七 コウきく八。やがめくは[illegible]
なるとされるんと
まめをかけて[illegible]〽小八 いやもう[illegible]の皮さ

〽清七 くまめへのあうがよろがじいて。おいらァあの門まいせへかのぞ
〽小八 よいなもおくらまいこ ト 清内もやあ[illegible]のかく来りぞ[illegible]まん中を[illegible]
〽清七 なかなか旅をされたいろくの同まおふかのぞ。おいらが
やうな宿匠なる かのとくの直き筆れむ。男ぞ〽木三
あのへおかみさんへの。ぞんでもなれがのし。あいちくのふらへ。
あんまり声うりかぞ。からしげるふしぎ[illegible]とおもひな
しぶ。あのふしへ僕めの[illegible]あんどのし〽清七 あのちくのやろうろ。
おいらが供き〽加賀 おかみさん。お前を[illegible]さへ[illegible]のし。

〽張 おやらの商売ハ金貸さよりさの出店ハ居抜の家田舎
の出世でハ酒も造る醤油も作る〽此術の所為なり。
あるとき引せる〽張 おいらハなるものし稼へ。おいらがところの
居候ちらで。只今ちんちん世話をして呉る程で宿なしぶ
から。銭そ持まで出るものも工んぐの女をきせてもら
ちぐおるぶやるが。女房ももうて置し。云ふハ稼人が。
性がわるいぶやるぶらうぶ。九字をぶそとして。貰ぞる其ともの
女の気 〽張 そのおのだるハのし〽張 そそおかみへそれし。まあ

ちくの世話ぞやうの内でやるせへ。あの男ハ二三年あとぶ
をして死く瘡と疥いで銭ちやがく湯わさ取りて。只内ちが
金と出して湯治まで出て行くがそれでもそうで出でもあ
がせんで大癪癪がきる稼ぐら。そしのかめとやつる婿
まっとむまより内で。まるまとし再発のきてくがある。
うつる稼へやるまる者を呼出して其ふいの内で守りなせへ。
コリヤア術の男とまるくいの内ふらかの人をふま。の内で一疾
で。おめへ二喰ゞとあれは世るがきのぞくぐらう ト



ハゞまろかのうろ々しきかへ。[illegible]ゆへのいゝも
ぞくしまさゝハをふくせんとこの世[illegible]つかりまて。[illegible]からの
あんが[illegible]ぶひく[illegible]ぞて コレ(ゆハ)てきわすりのおいらん。そのおんよ
きてこバとれをきてまゐし
手を流けるぞ。その男ハ性(しやう)が道楽(どうらく)どうらく。枕(まくら)さがしとも
よみも書き経へあきのかのや。蔵入(くらいれ)する手を流ける
せんまハ[illegible]。ゆきあまがいゆとてををつけさんがつうそう
ちくのおいらん。人のまさをふみ男なで。池彩(さい)書ろさゝる。
まゆまとての高(たか)きたがいのかとそそう。ぼだ書のの一所ぶも書き
経へハくしトとがひよしろくらふをふさつの世へ。すだめるかわしてきて
めらしずてつまゆくうしてふらうらも生てゆきし。ゲ。

ふるびたるをほてにあかみなるをいひ出てわれゆきしがまだ参らず。そして
弥「コリヤきた八。手めへもひ
そりやおめへ。はやまつて盗人をおひ出して。おれがかねを取逃（とりにが）し
た。コリヤかふいふきやアがる盗人め。北「おめへがまんせいからく
かそそふであわてるものを。埒（らち）があかなくして岩せいさト
此内亭主の女房はうきた八の手をとらへひろふことをまだめぐりけそ
きまりそふし。それくうちのゑいさくのてをいへとゑいむかせんて。ふ
八はひろうそのさかへるをてくとむけあるちそいるをみるんだとあとまゝて。
ききそそて手のやつのそへうと男どもとおそしぞんがんをとひけてさけて。
ぶつさへ〽にひや〽コリヤ〳〵おなの所めうちがかくんぎそ〳〵。お
えんどへ
のまでからちうやく性体（しやうたい）をぐずり出しあつてへ。天

今ごろ出てうけつちやアすまねへ弥「アイヤ〳〵もおかの所（ところ）くとうぬす
人の身であつて今せいさが人あの手がゝコチでちよそふぬかしあが
うちやアちがひあるまいぞトむりやりにしよびいてゆかんとする所へ。
おもてのまどのあけかうとひらきにあんどうかけ。まるくちやうちん
まめかゝやらしまへあひまだそでのかしこまるとつぎなり。
きた八もあわてゝ今よりこちらへ近よつてきてとおもふそのさまをみて
さむきの侍が嫁とられ。侍「あつとゝ〳〵。コリヤ あいや
かまる。弥はなづきがふれて。まつくらで左右あやはい。コレ〳〵
おらへのふんどしがふんどしかかゝりかけのかトぐらぐら
こまきれよきよつかくて侍へヤイ〳〵あんでぶつてあるつきがふ。くぶけて。

ト手ぬぐひをとりて手紙をよむ。此内サがうてうろんとこゝうしてろけりので。
そこうからとなりからあつとこゝろし。さつきからさくさじれやうく まくし。あわてうろうろ。
侍ひくりさて〽是ぞも。あいやらまけのあつうる所が。おおらく ふくれて
なとりて
武士がうつたる。こりやく守ざりのふんどしがるる〽さつき ぞ どうじ
侍 里まちとう〽イヤそまもかうるが〽そんでも。あるくのふんどしが
きざんしるる〽侍 あるくてもまるるこりやく守ちのおいけちうらん
ごしがなく白刃を首を差く。絵がをしろ。出来たらうちへあん
なむも。ふうでもくまくてア なくなんぞ〽あるさくふんぎく
かれておぶろうわしらう〽侍 おぶ重 侍をひづるる。よあく人出来るふ譯

ひくなれかんがあるもんろ〽そんでもようろい。手中な人ませんでなる
〽侍 よく おど見てのさらんでのなる 詮義しおろく〽ソレく あるさの
緋ちりめん 細がさがりてあり手うごが。そ是下やア たかざんしく
なかの〽侍 ドレく おまぶく。コリヤ 直に安堵しろ。守ざりの
ふんどしは。あるまあけさぞ ト おものをとれ出てくるな
ぬけがしてそれからおさはうがおもをでるあけるうれればなるふごとも
うひがけのそてゆく。ぞかりかうかう
あきさんとまうか。
このやうとうちので。
二ノやみの 喧嘩 ６人とあく かの 丹

ありけるおくりハ黒がねの座
郷て上松の宿をすぎて。ありあふ方。御嶽権現の山を
ふしおがみて
暮はつる雪のみちけも詣人の
形ひとまりぬころも袂の目

木曾街道續膝栗毛七編　上本